

# J U M P I N T O

学生たちの国際体験記

# A

第

10

集

# N E W W O R L D !

## 2012



金環食



敬愛大学の学生

敬愛大学国際学部

JUMP INTO A NEW WORLD!

# 学生たちの 国際体験記

第

10

集



学生たちの  
国際体験記

目次

# 千葉から世界へ

□ 絵	宮城県名取市でのボランティア活動 ……………iv
	海外スクーリング：学生たちの■ンドン・パリ二都物語 ……………vi
	海外スクーリング：学生たちのシンガポール教育実習 ……………viii
	アメリカ海外スクーリング：サンフランシスコ7日記 ……………x
	2011年ワールド・フェアを通して ……………xii

## 第10集発行に寄せて

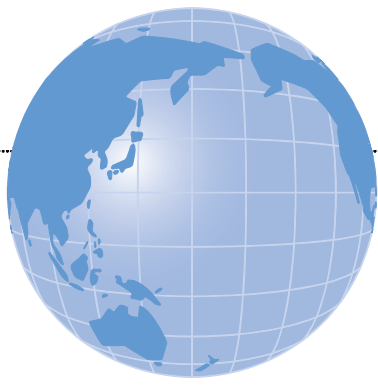
国際学部部長 中村圭三……………1

## Chapter 01 東日本大震災にどう向き合ったのか

A	宮城県名取市でのボランティア活動……………4
B	岩手県での東日本大震災体験記……………17

## Chapter 02 学びの拡がり

A	海外スクーリング：学生たちの■ンドン・パリ二都物語……………22
B	海外スクーリング：学生たちのシンガポール教育実習……………32
C	千葉の経済特殊……………46



# 自分が変わる、世界が変わる

JUMP INTO A NEW WORLD!

## Chapter 03 フード&アグリ研修報告

- A フード&アグリビジネスの試み.....52
- B 味噌旅行を終えて.....54
- C アメリカ海外スクーリング：サンフランシスコ7日記.....56
- D アメリカ海外スクーリングを終えて.....64

## Chapter 04 学内での学生たちの活動

- A 2011年ワールド・フェアを通して.....70
- B 語学ラウンジ便り.....71

### 付 録

- Jump into a New World! 規程.....75
- 執筆者一覧.....76



# 東日本大震災にどう向き合ったのか



雨のなかでの花壇造り



地元の方から説明を受ける学生たち



愛島仮説住宅集会所前にて



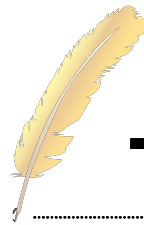
交流会でネパールの踊りを披露



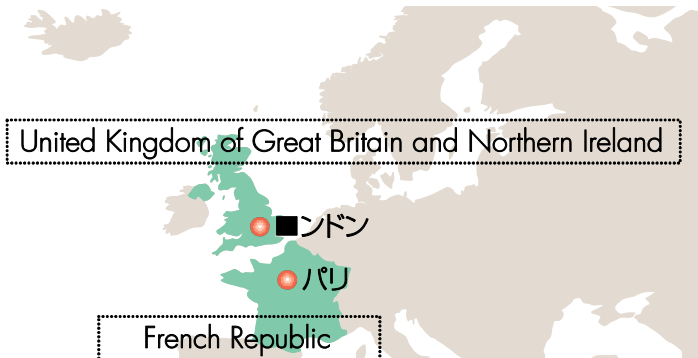
朝顔の蔦の撤去作業



話が弾む茶話会にて



## 学びの拡がり



凱旋門からパリを臨む



バッキンガム宮殿の門



ルーヴル美術館 王妃の寝室



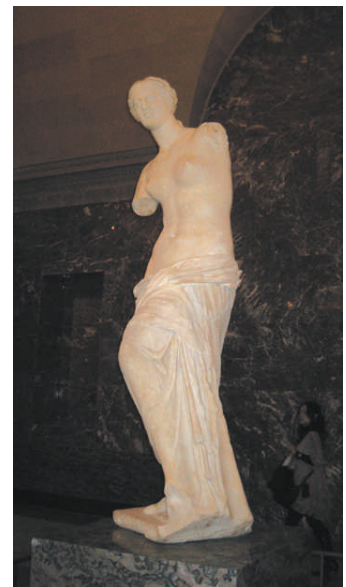
■ンドン橋を前に思わずポーズ



ルーヴル美術館



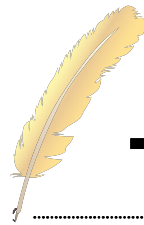
ウェストminster寺院



ミロのヴィーナス



# Chapter 02



➡B 海外スクーリング：学生たちのシンガポール教育実習

## 学びの拡がり



私もマーライオン!



マーライオン前で

Singapore

●シンガポール



ボτανニックガーデン



メイフラワー中学校の授業に参加して



メイフラワー中学校の交流行事の看板



メイフラワー中学校の生徒たちと



サルタンモスクをバックに



貴重な体験を胸に帰国

# Chapter 03



- ➡A フード&アグリビジネスの試み
- ➡B 味噌旅行を終えて

## フード&アグリ研修報告



味噌文化探訪の旅



ツインピークスよりサンフランシスコ市街を臨む

➡C アメリカ海外スクーリング：サンフランシスコ7日記

➡D アメリカ海外スクーリングを終えて



サンフランシスコのチャイナタウン探訪



Farmer's market



サンフランシスコ



サリナスの体験農場 ワゴンで一周



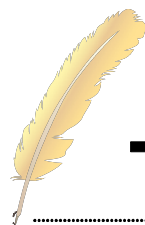
サリナスの体験農場 ハウイーンのかぼちゃが鮮やか



早朝のホテルで朝食



ワッソンビルの仏教会で日系の方々と交流



## 学内での学生たちの活動



フリーマーケット



民族衣装のファッション・ショーの案内

# Chapter 01



## 東日本大震災にどう向き合ったのか

---

- A 宮城県名取市でのボランティア活動
- B 岩手県での東日本大震災体験記

# 被災地のことを忘れないように

学外授業(宮城ボランティア活動)を通して

国際学部国際学科教授 櫛田 久代

2011年9月21～23日にかけて、宮城県名取市にある尚綱学院大学しやうこうがくいんのご協力を得て、本学の学生達が被災地でのボランティア活動に従事してきました。国際学部から25人、経済学部から3人の計28人(内7人はネパー

ル、バングラデシュ、ベトナム、中国、モンゴルからの留学生)が参加しました。また、今回、学生の引率には水口、櫛田、八代が当たりました。以下が2泊3日のスケジュールです。

## ◆ 2011年敬愛大学学外授業の概要 ◆

月日・天候	主なスケジュール
9月21日(水) 雨(台風15号)	8:00 千葉市稲毛区稲毛駅前イオン前集合 8:30 出発 台風のため宮城県到着が大幅に遅れ、 当初15:30開始予定の尚綱学院大学との交流会中止 17:30 秋保温泉到着
9月22日(木) 曇りのち雨	8:00 秋保温泉出発 9:00 名取市役所到着 9:30～11:00 名取市関上(ゆりあげ)地区視察 11:30～17:00 愛島(めでしま)仮設住宅にてボランティア活動 18:00 仙台市内ホテル泊
9月23日(金) 晴れ	8:00 ホテル出発 9:00～13:00 愛島仮設住宅にてボランティア活動 尚綱学院大学学生、教職員を交えての交流会 13:00 愛島仮設住宅出発 20:30 敬愛大学稲毛キャンパス着 21:00 解散

備考：敬愛大学スクールバス使用

初日は、台風15号の北上とともに千葉を出発し仙台に移動するという悪天候で、東北自動車道が途中福島県郡山で通行止めになり、仙台到着まで9時間かかりました。また、23日の復路でも、東北自動車道の飯坂インターチェンジ付近で起きた土砂崩れの影響で大渋滞に遭い、無事大学に到着するまで7時間半を要し、今回の東北行きは、大自然の厳しさを身近に感じるものとなりました。

ボランティア活動は、2日目から始まりました。午前中、尚絅学院大学庄司則雄先生のご案内で特別に視察許可を得て、東日本大地震による大津波で大きな被害を受けた名取市<sup>ゆりあげ</sup>閑上地区を視察しました。この地区だけで約1000人の方が津波でお亡くなりになりました。現地に入ると、目の当たりにする光景に一同言葉を失いました。今も回収されず放置されている漁船やボートがちらほら残るとともに、あちこちで瓦礫の山が連なり、地区一番の小高い丘よりも大きくそびえ立っていました。この辺りは、かつて松原が広がり、風光明媚な地域だったのだそうですが、その面影はまったくありませんでした。

被災地視察後、閑上地区の方々が暮らす<sup>めでしま</sup>愛島東部団地（名取市仮設住宅）に入りました。そこで、私たちが取り組んだ活動は、「花のある暮らし」と被災者の方々との交流でした。男子学生は、水口先生、八代さんと一緒に、冷たい雨のなか、3ヵ所の花壇造り、各世帯への鉢植え提供、そして季節外れとなった各世帯の朝顔の蔓の撤去作業に取り組みました。一方、女子学生は仮設住宅の集会所において喫茶コーナーを運営しました。幸い、最終日は天候に恵まれ、千葉から一緒に連れてきた千葉県のマスコットキャラクターである「チーバ」君も登場し、「チーバ」君は仮設住宅の方々から大歓

迎を受けました。

私は主に女子学生と一緒に集会所を担当しました。実は、被災者の方々に接する際、被害状況や死者の話題は避ける心づもりで臨んだのですが、皆さんから、津波のこと、家族のこと、今の暮らしのことといった震災の体験を伺うことが多かったです。そこでは、生き抜いた体験談を通して、「今があること」の大切さ、どんなに過酷であっても命があるからには「生きなければいけない」ことの命の重さに接すると同時に、彼らの「生きる」強さに心を打たれました。

一方、2日間の屋内外のボランティアの現場では、天候を含めて予想外の事態の連続でした。指示されることに慣れている学生たちにとっては、自ら考え行動しなくてはならず試行錯誤の繰り返しであったと思います。トラブル発生が当たり前のような状況下で、当初戸惑っていた学生たちが、時間を追うごとに相手の立場になって考え、工夫して行動するようになり、わずか2日間での学生たちの変貌ぶりには目を見張りました。いずれにしても、被災者の方々を思いやり、真摯に対応する学生たちの姿は非常に誇らしかったです。

学外授業後、今回ボランティア活動参加者の活動報告書を冊子（『2011年度敬愛大学学外授業活動報告集——東日本大震災から6ヵ月後、宮城県名取市におけるボランティア活動』）としてまとめました。そこには、学生たちそれぞれが被災地で何を感じ考えたのが綴られています。どの報告書にも引き込まれるものがあります。本号の『JUMP INTO A NEW WORLD!』に収められているのは、その内の一部です。すべての学生報告書を転載することができなかったのは、非常に残念でした。

さて、ボランティア活動に参加した後の私たちの共通の思いとして、被災地のこと



を周囲に伝え、被災した方々のことを忘れない、ということがありました。そこで、10月25日、学内で「宮城県名取市におけるボランティア活動報告会」を開き、活動報告を兼ねて被災地の現状を伝えました。さらに、11月12・13日の敬愛フェスティバルでは、「宮城ボランティア写真展」(含ビデオ上映会)を開催しました。写真展の来訪者のなかに、宮城県の被災者の方や神戸の震災を経験した方がおられました。阪神淡路大震災の体験者が、時間がたてばどのような支援が必要なのかについて、学生たちに語ってくれたのは印象に残っています。当写真展は一部内容を縮小し、現在3号館2階コミュニケーションラボにおいて常設展

示しています。今回のボランティア活動、学内報告会、そして写真展の様子は、随時、本学HP「国際学部だより」(2011年度)に掲載しておりますので、ご覧いただければ幸いです。

「私たちに何ができるだろうか」という思いは今もなおあります。この学外授業は、来年度以降も継続していく予定です。来年度のボランティア活動は、被災してから1年以上経ち、活動内容はさらに複雑なものになるかと思いますが、私たちができることに常に精一杯取り組みたいと思っています。

(2012年1月29日記)



## 国際学部国際学科4年 林 秀雲

私たちは宮城県名取市閑上に行ってきました。閑上地区には3000人の住民が暮らし、水産業で栄えた町でした。津波のせいで家が流され、約1000人の住民の方々が亡くなりました。これまで私はボランティア活動を何回もやりましたが、被災地現場に行ったのは、これが初めてです。地震が起こった日、私は朝までずっとニュースを見ていて、涙が止まりませんでした。この映像が頭のなかに刻まれていたせいか、現場に行き、地面しか残ってない被災地を見たとき、再び涙が止まりませんでした。閑上地区を後にして、私たちは名取市の愛島東部団地仮設住宅に行きました。ここには200世帯、約400人の被災者が住んでいました。往路の台風、帰路の土砂崩れなどを含めて、沢山のことが記憶に深く刻まれました。そのなかで、強く印象に残ったことを3つ挙げます。

1つ目は、往路時の強い台風のなか、一生懸命バスを運転していた八代さん、数時間ずっとバスのフロントガラスを拭き続けた水口先生の姿。

21日、私たちは台風15号の強い雨のせいで道があまり見えないなか、一路宮城へ向かいました。途中、水口先生は私たちの安全を考えて「東京に戻るのはいかがでしょうか？」と私たちに聞きました。しかし、全員の「絶対に仙台に行きます」との意見に従い、バスはそのまま宮城に走り続けました。雨はさらに強くなり、先生たちはタオルでくもったフロントガラスを拭き続けました。長時間のバスのなかで、私たち学生はずっと寝ていました。目的地に着いたとき、学生たちは「疲れた」という言葉を発していました。しかし、先生たちはずっと電話連絡をしたり、ホテルの手配をしたり、次の日のスケジュールを確認したりして、少しも休んでいないのに「疲れた」

とはいいませんでした。先生たちのおかげで、今回の活動ができました。本当に心から感謝いたします。

2つ目は、愛島東部団地仮設住宅集会所で高橋さんが作成した絵と世界地図帳。

私たちが理解しやすいように、被災地住民の高橋さんが翌日(23日)、昔の閑上地区で自分が生活していた様子を絵に描いて、私たちにみせてくれました。また私たち7人の留学生の出身地を世界地図帳で一つ一つ調べて来てくれました。小さいことですが、私はすごく感動しました。

3つ目は、愛島東部団地仮設住宅集会所での大宮さん(尚絅学院大学の学生)の話。

大宮さんは、「地震が起こった後、俳優さんたちがこの地に来て、『頑張ろう』と声をかけて自分たちを励ましてくれましたが、本当は複雑な気持ちです。自分たちは必死で地震と津波から逃げて、生き延びました。あと何を頑張ればいいのか? 例えば表現を替えて『一緒に頑張りましょう』とか言ってくれれば、気持ちも楽になるのです」と話してくれました。彼は今回の地震と津波の被災者の一人です。おじいさんと一緒に、この仮設住宅に暮らしています。地震以後、彼はずっとこの地でボランティア活動を続けています。彼の話聞いて、私たちは被災者に対する言葉使いに気を付けなければならないと感じました。そして、自分にはこれから被災者のために何ができるか、と真剣に考えました。答えはまだみつけれません。しかし、今の自分がどのくらい恵まれているのかは気付きました。そして自分が勉強や仕事に対してもっと頑張らないといけないなと思いました。私はこのボランティア活動を通じて、有意義な3日間を過ごしました。本当に参加して良かったと思います。

私が今回のボランティア活動で印象に残っていることを3つ述べます。

第1に大津波の被災地である名取市閑上地区の訪問です。第2に愛島仮設住宅での花壇整備やネットの撤去、球根の植えこみなどのボランティア活動、第3に現地の仮設住宅に住む人々や尚絅学院大学の学生や教職員の皆さんとの交流会です。

このなかで私が一番印象に残っているのは、大津波の被災地である閑上地区の訪問です。この訪問が一番印象に残っているのはテレビのニュースや新聞で見た映像や写真よりもいっそう悲惨さを感じたからです。私は3月11日の地震発生時から毎日、テレビや新聞、インターネットなどのニュースで被災地の情報を聞いてきました。地震が発生したとき、私は家にいましたが、その後のニュースで大津波が宮城を襲う瞬間を見たとき、思わず息をのみました。あれから6ヵ月が経ち、今回、2日目に被災地訪問として、閑上地区に行きました。台風の影響で道路が所々冠水していましたが、テレビで見たとおり、漁船が田んぼのなかで横転しており、津波で被害を受けた民家はブルーシートで覆ってありました。他にも電柱が傾き、道路がいまだに通行禁止になっているところも何ヵ所もありました。漁船は業者に多額の料金を払わないと撤去して港に戻すことができないそうです。大きな船会社の漁船はすぐに撤去できたそうですが、一般の漁船は震災の影響で漁師の仕事がなくなり、生活が苦しい状態で料金を払うことができないそうです。また、民家や他の建物の高さよりもがれきの山のほうが高いことに私は目を疑いました。そのとき、

私は「震災は人の命だけでなく、仕事や大切なものまで奪ってしまうのか」と自然に対してやるせない気持ちと改めて震災の恐怖を感じました。

今回のボランティア活動で学んだことは、被災者（相手）の気持ちになることの大切さです。地震が発生して以来、テレビやラジオ、新聞や広告で「ンバレ！ 日本」や「ンバレ！ 東北」の言葉をよく見聞きしており、私には被災地を励ます良いエールだと考えていました。しかし、最終日の交流会のときに尚絅学院大学の学生の一人が「有名人や政治家は私たちにンバレ！ と言うけれど、何を頑張ればいいのか。もっと私たちの現状を考えてほしい」と涙交じりに語りかけていました。私はたった一言の言葉で被災者の方々は荷が重くなり、先のみえない不安に駆られてしまうことに気付かされました。ボランティア活動では相手の立場に立って、慎重に言葉を選ぶべきだと教わりました。

最後になりますが、今回のボランティア活動で学んだことを今後の自分の身の回りの生活に生かしていきたいです。またこれから先もボランティア活動に積極的に挑戦したいです。今回、被災地の現状を直接自分の目で確かめ、現場から学ぶことを目的で参加しました。実際にやってみたら、目で見るだけでなく、被災された人々との触れ合いを通して被災地のことを考え、また言葉を選んで発言するなど被災者の立場に立って考えることを学ぶことができました。今回のボランティア活動は自分にとって有意義な活動となりました。

## 国際学部国際学科 地域こども教育専攻2年 根本啓太

私が印象に残っていることは、最初に「閑上地区の視察」である。次に、ボランティア同士で力を合わせて配った「花配り」、最後に「チーバ君を通して被災者の皆さんと交流できたこと」であった。

このなかで、私が一番印象に残ったことは仮設住宅への「花配り」である。被災者からの感謝の気持ちをとて強く感じる事ができた活動だったからである。また、「ありがとう」と言われる大切さを改めて感じたからである。ある被災者の方に花を配ったところ、その方はすぐに裏にあった植木鉢に植えてくれた。そのとき、私はそれだけでもとてもうれしかった。うれしさのあまり、思わず、「大切に扱っていただいてありがとうございます」と声を掛けた。するとその方は、「こちらこそありがとう、これから頑張って生きていくよ!」と答えてくれたのである。よくよく考えると、私たちボランティアは、もの凄いいことをしたわけではない。ただ、花を配っただけ。そんな小さな活動によって被災者に生きる希望を与えることができるのである。そんなに簡単に生きる希望など、与えられるものではないことはわかっている。おそらく、私たちが被災者のために頑張って生きてほしいという気持ちをもっていったからこそ、被災者にはじめて生きる希望を与えることができたのだと思う。物をあげるよりも心のこも

った行為のほうが人にとって大切であることを実感することができた。

今回のボランティアで私は、今後に生かそうと考えていたことがある。それは被災地のアルバム作りである。現在、私は小学校教員を目指している。そして、将来、被災地のアルバムを道德の授業のなかに取り入れ、子どもたちにみせ、東日本大震災の被災地の現状と、ボランティア活動の大切さを彼らに分かってもらいたいと考えている。元々、そのような気持ちから、このボランティア活動に参加した。もし、私が作ったアルバムをみて子どもたちが十分にボランティアの大切さを分かってくれるなら、その子どもたちが大人になり、やがて子どもが生まれ、その生まれてきた子どもにも受け継がれる。このような連鎖が永遠に続いてくれると私は信じている。ボランティアの大切さを感じた一人の先生から、少しでも社会のなかでボランティアの輪が広がっていく。そうすることで、ボランティア精神が生きてくるのではないだろうか。

私はまた来年もボランティアに参加し、アルバムの内容を増やしていきたいと思う。



9月21日から3日間、私たちは東日本大震災の被災地である宮城県名取市を訪れ、授業の一環としてボランティア活動をさせてもらった。そのなかで私が印象に残っていることを3つ挙げると、まず1つ目は、実際に大地震による大津波で多大な被害を受けた名取市閑上地区の視察。2つ目は、被災された閑上地区の方々が暮らす愛島東部団地でのボランティア活動。そして3つ目は、尚絅学院大学の方が大地震の当日に実際に体験した話である。他にもこの3日間で印象に残っていることはたくさんあるが、そのなかでも特に印象に残っているのが、最初に挙げた閑上地区の視察である。

大地震から訪問当日までに、散々テレビのニュースで見てきた被災地。それは、津波が町に押し寄せてくる瞬間や、その津波から必死に逃げようとする人々、そして津波にのまれ跡形もなくなった多くの町の映像だった。テレビの画面を通して幾度となく見てきた悲惨な光景だが、それでも実際に自分の目で見た衝撃と映像で見たものとはほど遠いものだった。いつ回収されるかもわからない漁船やボートが、田んぼに突

きささっている。撤去するのに20年はかかるといわれている瓦礫が山のようにそびえている。津波の直前まで立派に建てられてあったであろう家の一軒一軒が、基礎だけを残して消えている。あまりにも悲惨すぎる光景を目の当たりにした私は、言葉を失うどころか写真を撮ることさえ恐ろしくなってしまった。この学外授業に参加する前から、私は被災地の様子のある程度は理解しているつもりだったが、知らないことのほうが多く、実は全然分かっていなかったと、今回のボランティアでつくづく実感させられた。

「被災地の様子を伝えることも立派なボランティアだ」と被災者の方々がおっしゃっていた。この言葉のとおり、私たちにはこれを伝える義務があると思う。「自分は被害にあっていないから関係ない」ではなく、みんなでこの事実を受け止めていく必要がある。「たかがそんなことで」と思うようなことでも、それが被災者のためになるなら、その「たかが」をこれからも続けていきたい。そして機会があればまた被災地に行き、もっとたくさんボランティアをしたいと思っている。



## 国際学部国際学科3年 外 祐一

まず、私がボランティアに行って印象に残っていることを3つ挙げたいと思います。

1つ目は、9月22日宮城県名取市の津波被災現場を見たことです。テレビで見るとよりとてもひどい状態で、普通の道に船などがいまだにありました。津波は建物の高さ3階くらいまでの大きなものだったと聞き、とても驚きました。瓦礫の山を見ると津波の恐ろしさが伝わってきました。現地の方々に話を聞いてみると、元通りに復興するまでに20年くらいはかかるそうです。

2つ目は、愛島仮設住宅に行き花壇を造ったことです（私はC班だったので、花壇を造りました）。朝は曇り空でしたが、仮設住宅に到着したとき、雨が降りだしました。雨のなか、私たちは花壇を造り始めました。地面を掘り返して、肥料や土を敷いてから、水仙やチューリップの球根を植えました。雨の影響で掘った穴に水がたまってしまうなど、うまくいかないときもありましたが、無事に花壇を造ることができました。この植えた球根は来年の春になるときれいな花を咲かせてくれると思います。仮設住宅の人たちがこの花を見て、すこしでも心を癒してもらえたらなと思います。私にとってこんなに必死になんかに取り組むというのは、とても久しぶりのことでした。みんなが協力して誰かのためにできることはとてもいい経験でした。

3つ目は、9月23日最終日仮設住宅集会所での尚絅学院大学の人たちとの交流会です。

尚絅学院大学の学生が代表で津波時の状況を具体的に話してくれました。彼は家族と一緒に逃げるのができたけれど、ペットを家に残してきてしまった、と、とても後悔していました。それと彼の話のなかで一番心が痛んだのは、「頑張れ」という言葉の意味でした。被災地の人に簡単に頑張れ！などと口では言えるが、彼らにとってはとても辛い言葉だと聞かされて、確かに自分も同じ状況だったら嫌な言葉だと思いました。よく「頑張れ日本！」という言葉があるけれども、この言葉は頑張っている人たちには場合によっては言われたくない言葉なのかもしれません。

最後に、一番印象に残っていることを述べたいと思います。

やはり、被災現場に行ったことです。町一つ丸ごと津波にのみ込まれたような感じでした。

花束がおいてあるのを見てみると、胸がとても熱くなりました。地震と津波の恐ろしさをこの目で体験することができました。今回の学外授業で学んだことを友達や家族などに話したいと思います。被災地の人たちの辛さや津波現場の事を具体的に話して、共感してもらいたいのです。この体験を今後将来に生かしたいと思います。困っている人がいたら、助けたいと思います。困ったときはお互い様だと思います。みんなが助けあえば、きっといい世の中になると思います。

私が現地に行き活動したことで印象に残っていることは、名取市閑上地区の被害状況の視察と愛島仮設住宅の方々との触れ合いと尚絅学院大学の学生の話である。

そのなかで特に印象に残っていることは、尚絅学院大学の学生の話である。話のなかで、「命からがら逃げてきただけでも十分なのに、これ以上何をがんばればいいのか」という言葉を聞いたときに、「がんばれ」という言葉の重さを改めて実感した。私はニュースや街でよく目にする「がんばろう！日本」「がんばろう！東北」というスローンに疑問を抱いていた。いったい何をどうがんばってこれから生きていくのか、どうやってこの状況を乗り越えていくのか、方向が示されずに、ただ「がんばろう！」と謳っていても、それはきれい事だと思っていた。私は以前から「がんばる」という言葉が好きではなかった。それは、具体的にどうがんばるのか示されておらず、軽く言える言葉だからだ。同じ方向に向かって一緒に何かをする場合に、その仲間同士で「がんばろう」と声をかけ合うことと、まっ

たく関わりもない人からかけられるのとは感じ方が違う。その違いを、私は高校時代の部活動や大学受験のときに感じている。だから、どのような場合でも、その人がどれだけの思いで生きているか、どれだけの思いで物事に取り組んでいるか、分からない自分が軽く「がんばれ！」などと言っただけではいけないと自分のなかで思っていた。今回話を聞いてさらにその思いが強くなった。

このことから、人に「がんばる」という言葉を使うときには、その言葉のみでは使わないよう心がけたい。「がんばる」を言う代わりに、その人を思いやる言葉をかけたい。例えば、「今日は寒いから暖かい恰好をして風邪ひかないようにね」と言うなどである。私は「がんばれ」と言われるよりも、このように体を気遣った言葉かけのほうがうれしい。私もこれから生きていくなかで、「がんばれ」と声をかける機会が多々あるだろう。そのときには、今回感じたことを忘れず、心がけていきたい。



## 国際学部国際学科1年 リ・タン チュン (出身：ベトナム)

今回の敬愛大学・東日本大震災ボランティア活動のおかげで色々勉強になった。そして、次のようなことが私の印象に残った。

- 日本のことわざ「百聞は一見にしかず」は本当だった。テレビや新聞などを見たり、読んだりするより、実際に行って何もない現場を見たときの気持ちは、本当に「びっくりした」の一言であった。
- 宮城県名取市閑上地区だけで約1000人が亡くなったと聞いて、本当に驚いた。しかし、この閑上地区の人々は家や車そして親戚などを失いながらも、その多くが仮設住宅暮らしで頑張っている。このことは大変素晴らしいと思った。
- 雨にもかかわらず地区の人々のために、私たちもよく頑張った。私たちが植えたバラの花、パンジー、水仙を彼らが心から喜んでくれた。これを見て、私は本当に嬉しかった。

上記のなかで一番印象に残ったのは、閑上地区の皆さんが子どもや家族のために一生懸命仕事をしながら蓄えた財産を、また家族そして親戚をも3月11日の津波で、すべて流されて失ったこと、またこのような状況のなかで助かった人がいたこと、そして皆さんが大きなショックを受けたにもかかわらず、元気で生きていること、この3点であった。

私は、自分の目で実際の現場を確認しながら、また色々な話を聞いて、人間は何のために生きているのかを、考えるようになった。もちろん人は子どものため、家族のために働く。しかし、何十年間も頑張ってきたのに、現在“0”という数字に戻ってしまった。もし地震が起きた後、津波緊急速

報を皆に知らせて、安全な場所に避難させていたならば、こんなことは起こらなかったであろう。しかし、残念ながら地震が起きた後、すぐ停電になってしまった。若い人たちは携帯電話を持っているから避難できたであろうが、高齢者がほとんど避難できず亡くなられてしまった。本当に残念だ。

それゆえ、今後、名取市閑上地区のような悲劇を繰り返さないように、私は次のようなことを考えた。地震が起きたら、まずは落ち着いて、臨機応変に安全な場所に避難したらいいのではないかと。また、避難場所をもっと設置しなければならないのではないかと。たとえば、昔、私の母国ではベトナム戦争のとき、避難場所が多数設置された。地上に作ると相手に見つけられるのでトンネル避難所を作った。日本では海の近くに避難所を作ると津波で壊される可能性が高いので、トンネル避難所などのように、地下をうまく活用することを勧めたい。さらに町の人口に応じて、住民たちの食糧を最低でも1週間分を備蓄しなければならない。そして子どもや高齢者の安全第一が最優先である。

本当に今回の東日本大震災ボランティア活動は色々勉強になった。確かに雨のなかでの作業は大変だった。しかし、愛島仮設住宅の皆さんが喜んでくれて、泣きたいくらい感動した。日本のことわざ「一寸先は闇」であるように、ベトナムも今後どうなっていくか分からない。だからこそ今回のボランティア活動で学んだことをベトナム人に伝えたいと思っている。ベトナムに帰国しても、愛島の人々を応援した気持ちをいつまでも忘れない。



学外授業2日目、宮城県名取市の被災地を高台から見た第一印象は、何も無い、だった。震災から半年、何を今更な事を言っているのかと思われるかもしれないが、テレビで見て知っていたはずの景色が急に現実味を帯びた感じがしたのだ。酷い津波被害の後に残った家の土台のみがある更地、処分待ちの積み上げられた瓦礫、歪んだードレール、歴史ある松林が数本となり傾いている姿。すべてが、本当にここで大勢の人が生活していたのだと実感させるものだった。高台から見えた台風で荒れている海よりも何十倍も高かったらしい地震による津波はもう想像しかできないが、相当な恐怖であったことであろう。

そこからボランティア活動をするために愛島仮設住宅に着くと、仮設住宅に住んでいる方々が温かい笑顔で迎え入れてくれた。想像していなかった住民の方々の明るい笑い声と気軽な態度に接して、私のほうが緊張も無くなり元気をもらった気がした。

仮設住宅には2日間しかいる事ができなかったが、強く心に残ったのは、今回のボランティア活動に協力してくださった尚絅学

院大学の男子学生の話だ。彼は震災が起きたとき、自宅に祖父と2人であり、「とにかく逃げなければ危ない」という一心で祖父を連れて避難所へ行き、そこから学校へと移ったので無事助かったそうだ。私はこの話を聞き、彼の判断力と行動力に驚いた。何故なら、私も震災時は祖母と自宅に2人であったからだ。しかし、私がそのときできた事は祖母の安全を確認し、親の仕事場が自宅から近いのを良い事に、親が帰ってくるのを携帯片手に待っていただけだった。幸い、津波が来ない所に自宅があったため被害は無かったが、自分の防災意識の低さが如実に表われた結果だと思った。

正直、帰ってきた今のほうが「もっとやれることがあった」と後悔する事のほうが多いが、被災地へ行き貴重な話が聞けた事で自分の災害時の行動を見直し考える機会にもなった。また「頑張る」と応援するのではなく、「助け合おう」とする気持ちが一番大切なのだと知った。大金を持っていない学生の私でも、携帯やパソコン、新聞等の被災地を知る情報源はたくさんある。それらをこまめにチェックする事で直接行く事はできなくても、被災地の方々のためにできる限りの支援をし続けていきたい。



## 学外授業の引率を終えて

今回私たちはたくさんの素敵な方々に出会いました。想像を絶する大自然の猛威を生き抜いた方々誰もがとても気高かったです。大切な人をそして多くのものを失ってもなお前を向いて生きる人々の強さと優しさにふれ、私たちは「生きること」について実に多くのことを学びました。学生たちは、ボランティア活動に従事した2日間、言葉にこそ出せませんでした、それぞれ自分に何ができるだろうかと模索し一所懸命でした。準備不足で右往左往することもありましたが、誠心誠意仮設住宅の方々のために奮闘した学生たちも素敵でした。今回学内外のさまざまなご支援とご協力のおかげで被災地ボランティア活動が実現しました。ここに深く御礼申し上げます。また、お世話になった名取市閑上地区および尚絅学院大学のみなさまにも深く感謝申し上げます。

(櫛田 久代)

誰かと誰かが「できること」「してほしいこと」どんなことでも、どんなときでも、気軽に頼み合えたりできれば…の事前授業説明の下、大学バス（通称長戸路号バス）は稲毛キャンパスから名取市に向け出発しました。日本人学生だけでなくベトナム・ネパール・モンゴル・バングラデシュ・中国の留学生を含む、本学らしい特色ある学生28名+教職員3名で構成されたボランティア活動「学外授業」の始まりでした。

現地において、荒天のなか、愛島東部仮設住宅集会場周辺部に「敬天愛人花壇」造

成、集会所では仮設住宅に居住している方々と親身に膝を突き合わせてふれあう活動を行ない、個々人が持つ特色をそれぞれ出した息のあったボランティア活動を行なっていました。

学園長長戸路先生からは、学生の参加費を軽減すべく、高額の御寄附を頂戴しました。また、本学第19期（昭和62年度）にて卒業し、現在株式会社「オランダ家」に勤務されている成瀬忍氏からは、勤務多忙の傍ら本学まで房総郷土菓「落花生パイ」の協賛品を届けていただいた他、株式会社太陽社や株式会社坂本屋総本店から千葉県名産加工品の協賛を頂戴し、仮設住宅で避難生活を続けている居住者の皆さんにお持ちいたしました。さらに職員親和会一同からの義援金につきましては、花壇造成・鉢植えの寄贈に使わせていただきました。これらのご協力は千葉敬愛学園創始者・故長戸路政司先生を始め、諸先輩が営々と築かれた建学の精神「敬天愛人」から生まれた厚意であると確信しています。敬天愛人の精神は、仮設住宅地におけるボランティア活動（各住宅への鉢植え配布に対する訪問・朝顔の薫除去作業・花壇造成・ふれあい喫茶等）において、学生の住民の方々への真摯な態度を生み、学生と住民の方々との間の信頼関係の醸成につながったと自負する次第です。

今回のボランティア活動で私自身多くの方々との「ふれあい」各種作業を通じて新しい見聞と経験を得、参加させていただき感謝申し上げます。今後同様のボランティア活動が継続されると聞き及んでいますの

で、計画された場合には微力ではありますが、参加させていただきたいと私考します。

(八代 潔紀)

### 「雨ニモマケズ」

9月21日、学外授業の出発日は、奇しくも東北の詩人宮沢賢治の命日と重なりました。今回の活動では不思議と賢治のことが頭に浮かんできました。まず、彼の有名な詩「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」通りのスタートとなり、学生たちが被災地で精一杯の活動をしている姿は、まさに「ジブンヲカンジョウニ入レズニ」「オロオロアルキ」という言葉そのものでした。

賢治自身、生まれた年に「陸羽地震」、死の半年前に「三陸沖地震」を体験しており、その作品の多くには東北の自然への深い思いと無常感が織り込まれています。また童話『グスコブドリの伝記』では、全体が

幸福にならなければ個は幸福にならないとの認識を明示しています。この自然観、人間観は、本学の「敬天愛人」の精神に通じるものがあるように思います。

今回の活動で、東北地方、日本復興、そして「生きる」ということについて考え直す貴重な機会を得ました。この活動を支えてくださった県庁、高等学校、企業、本学の役員・教職員の皆様や市民の方々に深く感謝申し上げます。また、行動を共にできた学生諸君、教職員の仲間にも感謝の気持ちでいっぱいです。そして、何よりも、温かく迎えてくださった愛島仮設住宅の方々、ならびに尚絅学院大学の皆様に心より御礼申し上げます。この素晴らしい「人生の宝物」を無駄にしないと心に誓ったことをここにご報告申し上げます。

(水口 章)



今回の宮城県名取市におけるボランティア活動に以下各方面からご支援いただきました。ご協賛賜り誠に有り難うございました。

株式会社オランダ家 株式会社太陽社 株式会社坂本総本店 幕張総合高等学校  
津田沼高等学校 千葉敬愛高等学校 千葉県総合企画部報道広報課 (敬称略)

最後に、個人で参考書等を寄贈された方々に厚く御礼申し上げます。

## 国際学部国際学科2年 花澤 隆介

## 震災発生～1日目

2011年3月11日午後2時46分――

私は岩手県平泉で自動車の免許合宿に参加していた。校舎の2階で学科教習を受けていると、突然非常警報が鳴り、すぐに大きく部屋が揺れた。慌てて階段を降り、外へ逃げた。外に出てから振り返ると、さっきまでいた教室の窓ガラスは粉々に割れ、外壁も崩れていた。突然のことで何が何だかわからず、気づいたときには東京の家族に電話をしていた。互いに落ち着きを失っていたせいか、安否確認だけで電話をすぐ切ってしまったが、その後何日間も電話はつながらないことになる。

小雪が降る中、言われるままに宿舎から荷物を持って、近くの小学校へ移動した。寒く暗い体育館で毛布や布団にくるまりながら、寒さを凌いだ。食べるものは配給のおにぎり1個だけ。水道は出ず、風呂やトイレもいつもどおりには使えない。寒さと余震で眠れない一夜を過ごした。こうして4日間に及ぶ避難生活が始まった。

知らない土地、慣れない環境での避難生活は不安だらけだった。唯一の救いは一緒に合宿に来ていた友人、野口君の存在。一人で合宿に来て震災に遭っていたら、精神的に堪えることを、より強いられていたことだろう。

## 2日目

夜が明けると、ラジオや新聞などで地震の状況が少しずつ明らかになってきた。津波の被害で跡形もなく潰れた建物。合宿に

来たときに乗ってきた電車の、ぐちゃぐちゃになった線路。目を覆うばかりだった。被害の状況がわかるにつれ、すぐには東京に帰ることができないことがわかった。

## 3日目

この日、隣の幼稚園で水道が使えた。

少し赤土が混じったような冷たい水だが、頭を洗うことができた。仮設トイレも設置された。また配給される食事もカレーや味噌汁など少し豪華になっていった。合宿で知り合った友人と運動や会話、被害の情報収集などをして避難所の日々を過ごしていたが、体育館での避難生活は時間の経過を遅く感じさせる。まるで時間が止まっているかのようで、何度も時計を見返していた。それは度重なる余震のせいで不安が募っていたからだろう。

## 4日目

この日から避難生活をしてきた体育館を離れ、教習所の宿舎に戻ることにになった。合宿をしていた部屋は、“あのとき”のまま。テレビが床に落ちている。宿舎のほうは電気や水道がまだ使えない。

陽が沈んで綺麗な月が出た夜、自動車のライトで宿舎を照らし、懐中電灯の灯りを頼りにおにぎりを食べていたとき、電気と水道が復活した。そのときの嬉しさは今でも鮮明に憶えている。シャワーを浴び、夜には東京にいる家族や友人と電話ができ、声が聴けた。その日は宿舎で一夜を過ごした。もちろん、余震の不安やいつ東京に帰

---

れるかわからない不安は消えることはない。

### 5日目

教習所側の運営が困難となり、教習中止の判断が下る。また今日、宿舎を出てバスで関東に向かうことを告げられた。荷物をまとめ、宿舎を出発したのは午後3時。そこから遠回りしながらも使用可能な道路をみつけては、バスを走らせた。狭い車内では脚もろくに伸ばせない。必ず2時間に1回のペースで休憩が入り、外の空気を吸ったり、体操をして、バスを走らせること18時間、やっとの思いで埼玉県の大宮に着いた。

### 6日目

大宮に着いたときには、午前9時。そこから震災のダイヤで運行している電車を乗り

継いで、自宅に着いたのが6時間後のこと。夜には16日間ぶりに家族と再会することができた。家族の姿をみて安心したのか、震災後はじめて不安から開放されたと同時にすぐに涙が出てきた。しばらく言葉が出てこなかった……。

教習中止とあって、残りは近くの教習所に通い免許を取得した。合宿で取るよりは時間は掛かってしまったが、取得できたときは達成感が大きかった。

今、こうして思い返すとすごく貴重な体験をした。この体験を忘れてはいけない。仲間と助け合い、支え合いながら過ごしたなかで、学んだことをこれからも大切にしていきたいと思う。

## 国際学部国際学科2年 野口 耕平

3月11日14時46分18秒僕たちの日常が壊れた。

3月1日から僕は大学の友人、椋澤隆介君と岩手に自動車免許の合宿に参加していた。ここを選んだ理由はなんてことはない、予約したときにここしか空きがなかったからだ。

順調に教習をこなし、残すところは卒業検定のみとあって僕たちは、早くも「家に帰ったら何しようか」などと話していた。

そして11日、その日も朝から教習を受けていた。

突然僕の携帯がけたたましく鳴り響いた。最初はマナーモードなのになんだ？なんて考えていたが、確認してみると地震を知らせるエリアメールだった。教官から震源地はどこ？と聞かれ、応えようとしたところ大きな揺れが起きた。

最初教官は机の下に隠れるように指示をしたが、どうもいつもと感じが違う。僕は今まで、大きくても震度4までしか体験したことがない。しかし今回のこの揺れは何か違う。教官も同じことを思ったのか、すぐに外に出るように指示した。外に出て安心したのも束の間。再び大きな揺れが起き、校舎の壁が崩れ落ちた。その後まっすぐ歩くことも困難な揺れのなか、僕たちは教習所の校内コースまで避難した。

その後、揺れが収まってから布団など必要最低限の荷物だけ持ち、近くの小学校に避難した。

最初は楽観視していた。どうせすぐ戻っ

て教習再開するだろうと。しかし避難所から流れてくるラジオや、ときどき繋がる携帯から得られる情報から、事態がそんなに甘いものではないことがわかった。しかし情報は入ってくるものの、いまいち実感が湧かなかった。そうして避難1日目が終わった。

2日目以降、僕が一番悩まされたのは風呂に入れなかったことだった。食事に関しては一日中ほとんど動くことがないので、その分エネルギーを消費せず、空腹を感じることはなかった。しかし風呂に関しては、いくら冬とはいえ何日も入れないとすると気分が悪かった。

そうして寝て起きるだけの日々が4日続いた。たった4日と思われるかもしれないが、僕にとっては知らない土地で知らない人たちと一緒に、体育館に押し込められての生活は苦痛だった。ましてやいつ帰れるかまったく目処もつかない状況で1日1日を過ごすのは本当に気が滅入った。

4日目の昼頃、教習所の宿舎に戻ることに決まった。状況は何も変わっていなかったが環境が変わるのは嬉しかった。

宿舎に戻った日の夜中にライフラインが復旧した。

そして翌日の昼頃、教習続行不可が告げられ僕らは帰ることが決まった。

あと数日で卒業できたのに帰されるのは不本意だったが、この見通しのつかない状況のまま過ごすよりはましだった。何より

---

家に帰れるのは嬉しかった。

夕方頃岩手を出発し、約1日かけて自宅へと辿り着いた。

帰宅中のバスでこの震災後、さまざまな出来事があったことを携帯で知った。

募金であったり、信号が使えない状況で進んで交通整理をした人たちの話を聞いて、非常に感銘を受けた。

僕たちは一人で生きているのではないのだと、そう思った。

この震災で僕が一番強く感じたのは、“人を救うのは人”だということ。

もちろん生きていくうえで、水、食料、そしてそれを買うお金は必要だ。これらがあればお腹は満たされるかもしれないが、心までは満たされない。避難中、たくさんの人からメールや電話で励まされた。人から受けるそういった気持ちは何ものにも換えることはできないと思う。

東北の方々には、気持ちだけでは救うことのできない部分もあると思うが、優しさで救われる人もいるということを知った。

まだまだ僕にできることは限られているが、まずは身近な小さなことから人の力になれるようにしていきたい。



## 学びの拡がり

---

- A 海外スクーリング：学生たちの■ンドン・パリ二都物語
- B 海外スクーリング：学生たちのシンガポール教育実習
- C 千葉の経済特殊



# 学生たちの■ンドン・パリ二都物語

## 海外スクーリングに参加して

地域こども教育専攻1年（2010年参加時） <sup>た</sup> <sup>がみ</sup> <sup>はな</sup>  
田 上 華

2010年11月16日から23日までの一週間、私は海外スクーリングに参加し、ロンドンとパリに滞在しました。私は今回のスクーリングが初めての海外滞在だったので、とてもわくわくしていたと同時に、非常に緊張していました。

そもそも私が今回のスクーリングに参加しようと思ったのは、海外での経験が今後の生活に絶対にプラスになると思ったからです。大学入学以前から、海外旅行や短期留学へのあこがれを抱いていました。英語の上達への期待はもちろん、日本以外の国の文化や習慣を理解し体験したいと思っていましたからです。また、将来教師になって教壇に立った時に、自分の体験を子どもたちに話すことで、子どもたちが海外に興味をもってくれるといいなと思ったからです。さらに、ヨーロッパは一生に一度は行ってみたいところだったので、絶好のチャンスだと思い参加することを決意しました。たまたま、仲の良い友達も参加することとなり、初めて海外渡航する私にとって非常に心強かったです。

今回の研修で気づいたこと、思ったことをまとめました。

### ●11/16(火) 1日目 ロンドン

成田 港からロンドン、ヒースロー 港へ  
この日は10時集合だったにも拘らず、両替をするために8時に高橋さん（友人です）



成田空港でスッキリポーズ！なぜ？笑

と待ち合わせました。時間を持て余した私たちは、空港内のスターバックスコーヒーで朝からお茶をしました。10時、参加者が全員集合したところで搭乗手続きを終え、セキュリティチェック→税関検査→出国審査をうけ飛行機に搭乗。空港に向かう電車でトランクの持ち手が壊れた以外、特にトラブルもなく、いよいよ出国です。

### VS901機内

約12時間のフライト。機内では、旅行情報誌を読んだり映画を観てすごしました。映画は邦画・洋画合わせて3本観ましたが、特に『トイ・ストーリー3』が面白かったです。

### ヒースロー 港

寒さ対策とスリ対策を万全にしてイギリス入国です。当然のことですが、広告や標識が英語しかないことにとっても興奮しました。そして入国審査。

女性係官 “What is the purpose of

your visit?”

私 “Sightseeing.”

女性係官 “How long?”

私 “3 days.”

女性係官 “OK. Have a nice trip.”

とても緊張しましたが、上記のやりとりでなんとかクリア。この時に外国に来たんだな、と実感が湧いてきて、色んなことを吸収しようと気持ちが高まってきました。その後、空港内のMarks & Spencer (英国の最大手スーパーマーケットです) で初めてポンドを使って夜食の買出し。商品はシンプルな包装でプライベート・ブランドのものが多く並んでいたように思います。また、スムージー (シェークのようなシャーベット状の飲み物です) の種類が豊富だったことにも驚きました。私はそのなかから、BLTサンド (Bはベーコン、Lはレタス、Tはトマトです) とバナナスムージーをセレクト。ホテルでおいしくいただき、長い1日が終わりました。

## ●11/17(水) 2日目 ロンドン

いよいよロンドン観光です。ホテルの朝食バイキングでしっかりと腹ごしらえ。イギリスの食事はおいしくないと思っていたのですが、どれも美味しかったです。特にチョコブレッドが気に入りました。

ホテルから2番目に最寄のEarl's Court駅で“1DAY TRAVELCARD”(地下鉄に1日乗り放題のプリペイドカードです)を購入して観光スタート。ロンドンの地下鉄はドアが手動で、天井が低いからか窮屈な印象でした。

### 国会議事堂

Westminster駅で下車。階段を上がり空を見上げると、そこにはビッグ・ベン！とても興奮しました。遠くから眺めるとロ

ンドンの象徴というような貫禄を感じますが、近くに寄って見るとゴシック様式の細かな彫刻が施されており、また、ここで議会政治が始まったことを思い、歴史を感じました。少し曇っていたのが残念でした。

### バッキンガム宮殿 衛兵交代式

私たちが宮殿近くに着いた時には、観光客で広場がいっぱいでした。この日の衛兵は冬服だったようでグレーのコートを着て



朝からガッツリ！



門には女王のレリーフが



ロンドン橋を前に思わずポーズ

おり、有名な赤い制服を見ることはできませんでした。国会議事堂もそうでしたが、日本の国会や皇居とは違い、重苦しくなく開かれた印象を受けました。ブラスバンド隊が演奏していた曲が“雨に唄え”などのポップな曲だったことも印象的です。

### ロンドン塔・タワーブリッジ

私は世界史が好きで、特にアン・ブーリンやエリザベス I 世が好きなので、ロンド



こども番組『ピングー』



地元の小学生とロゼッタ・ストーン



フィッシュアンドチップス

ン塔を訪れることを楽しみにしていました。お堀にある囚人が入獄したとされるゲートや処刑台の記念碑など歴史にまつわるものの他に、ジュエル・ハウスでは世界最大のダイヤモンドなど王室の宝物を見ることができ、とてもうれしかったです。

またここでは、ロンドンで初めてカフェに入りました。注文する時は入国審査よりもドキドキしましたが、店員さんが優しく対応してくれて料理もおいしくいただきました。周りの観光客と思われる人たちのほとんどが、お皿いっぱい食べ散らかして席を立てて行ったことが少し残念に思いました。

### ●11/18(木) 3日目 ロンドン

朝、準備をしながらテレビをつけてみると、6時にも拘らずアニメなどのこども番組がずっと放送されていました。日本で以前放送していた、『ピングー』や『テレタビーズ』なども流れ、同室の高宮さんと盛り上がりました。

### ウエストミンスター寺院

ここは、ロンドンで私が最も気に入ったところです。建物に入ってすぐに、その荘厳な雰囲気によって圧倒され、色鮮やかなバラ窓やゴシック様式の彫刻に目も心も奪われました。また、多くの偉人のお墓があり、テープガイド（入口で1人に1台貸してくれました）を手にいれたこともあるかと思いますが、まるで博物館のようでした。一日中いてもきっと飽きない場所だと思います。ぜひ、もう一度訪れてゆっくり眺めてまわりたいです。

### 大英博物館

正直なところ、こんなに展示物が盛りだくさんなのに無料だなんて！ と思いました。時間がいくらあっても足りません！ 館内には小・中学生がたくさんいてそれぞ

れに模写やレポートを書いており、本物をこんなに身近に見て触って感じられることを羨ましく思いました。また、1グループ5～6人の生徒に必ず先生が1人ついていて、日本ではそのような少人数指導（まして校外学習で）はできないと思うので、とても驚きました。

#### King's cross駅／ロイヤルオペラハウス

大英博物館を見学した後は、自由行動になりました。いきなり「好きなところへ行っていいよー」と解放されたので、正直とまどいました。私たちは高橋さんだけの希望で映画『ハリー・ポッター』に登場する9・3/4番線を見るべく、King's cross駅に向かうことにしました。駅は東京駅のように大きい建物だったので、歩きさまよい、駅の係員さんに質問。

私 “We 'd like to go to 9.3/4 platform. Where is?”

男性係員 “Oh, go straight ahead...”

通じた！ しかし言われたとおり行ってみてもみつからない。うろうろしていると電車を待っていた男性が声をかけてくれました。

男性 “Do you want to go to Harry Potter's platform?”

私たち “Yes! Yes!”

男性 “Come on.”

いきなり話しかけられたので焦りましたが、男性がゆっくりと話してくれ、さらに、目的地まで連れていってくれました。うれしい体験です。そこには、カートの半分が壁に突っ込んでいて、観光客が記念写真を撮ろうと並んでいました。もちろん私たちも記念撮影（データを消してしまいました。泣）。その後、私の希望でロイヤルオペラハウスを見るべくCovent Gardenへ。帰りは地下鉄ではないもので帰ろうということで、2階建バスとタクシーを乗り継ぎ、ホテルへ



クライストチャーチ

戻りました。夜ご飯は、織井先生・有馬先生と一緒にホテル内のパブへ。レモネードとボリューム満点のフィッシュアンドチップスをいただきました。

#### ●11/19(金) 4日目 オックスフォード

オックスフォードはロンドンとは打って変わって緑豊かな静かな街でした。日本のようにどーんと校舎が構えているのかと思いきや、街全体がカレッジということで、驚きました。建物のすべて（学生寮までも）が文化遺産なのでは？ と疑うほど美しく、歴史を感じました。訪問したクライスト・チャーチは『アリス』の作者のルイス・キャロルが教鞭をふるっていたということで、ステンドグラスや掲示板にアリスが隠れていました。また、映画『ハリー・ポッター』に登場する食堂に入ることもできました。実際に毎日学生が食事をしているとは思えない雰囲気がありました。もっと堅苦しい雰囲気なのかと思っていましたが、大学も学生も街もラフな雰囲気で、親しみを抱きました。

#### ●11/20(土) 5日目 パリ

パリはもちろん英語圏外なので、ロンドンに行くよりもドキドキしました。朝はこちらのホテルでもバイキングでメニューは似たようなものでした。やはりここも、チ

ヨコブレットがおいしかったです。

ホテルからすぐのPorte de pantin駅で回数券を買って観光スタート。パリの地下鉄もやはり天井が低く窮屈で、改札が狭くて通りにくかったことが印象的です。

### ルーブル美術館

映画『ダヴィンチ・コード』で観たままの風景が広がっていました。天気がよく空



私のお気に入り\*王妃の寝室

がとても広く感じられました。テレビや本でしか見たことがなかった、『ミロのヴィーナス』や『モナリザ』などが目の前にあることが不思議な感じ

で、作品も雰囲気も満喫しました。私が特に気に入ったのは『ナポレオンの戴冠式』（ダヴィド作）です。ナポレオンのことは中学時代に詳しく調べたことがあったので、目についた瞬間思わず「あ！」と声をあげてしまいました。その絵の前で10分ほど見入っていたのではないかと思います。大英博物館もそうでしたが、雰囲気があまり気取っておらず、こんなに世界的な貴重な作品をカメラに収め放題というのは、日本では考えられない光景だと思います。

### シャンゼリゼ~凱旋門

私はシャンゼリゼ通りよりも、その手前の屋台通りのほうが気になりました。お店がカラフルで、また時々メリーゴーラウンドやジェットコースターがあってわくわくしました。

ぐるぐると螺旋階段を上り、凱旋門の上から見下ろしたパリの街は、幾何学的に区画されていてとてもきれいでした。エッフェル塔もしっかり見ることができました。凱旋門内の展示スペースに“世界の凱旋門”的な展示があり、日本は“厳島神社の大鳥居”だったことがちょっとおもしろかったです。

### エッフェル塔

私たちは、寒さと疲れに負けたこととエッフェル塔のモニュメントのキーホルダーを購入したことに満足してしまったので、エッフェル塔の展望台には登りませんでした。広場で、あるカップルがウエディングドレスを身にまとって撮影をされていて、こんな素敵な街で結婚式をあげられるなんて素敵だなあ、と横目で見ながらホテルへ戻りました。

### 女子会

ホテルに戻る前にmono'p（パリのコンビニです）で夜ご飯を買いこみました。イギリスから肉料理やパン かりだったので、も



凱旋門からパリを臨む



すごい量…

やしの芽がいっぱいのっているサラダをセレクト。ひとつの部屋に集まり、ガールズトークに花を咲かせながらおいしくいただきました。大抵、宿泊学習の時は夜遅くまで話し込んでしまうのですが、やはり気疲れと歩き疲れで8時頃に解散、10時には夢のなか、でした。

## ●11/21(日) 6日目 パリ

### ノートルダム寺院

この日は天気がよくなかったので暗い印象を受けました。日曜日だったので、寺院内ではミサが行なわれており、私も静かな気持ちで寺院内を見学しました。ステンドグラスがロンドンのウエストミンスター寺院よりも色が濃く鮮やかで目を奪われました。外の回廊を歩いている時は、探検しているようで楽しかったです。

### ヴェルサイユ宮殿

とにかく豪華絢爛でした。天井・壁・柱に施された彫刻や絵画はもちろん、それぞれの部屋の装飾品すべてに圧倒されました。ここでルイ16世やマリー・アントワネットが暮らしていたのかと思うと、国民から批判を浴びるのも無理はないかと思いました。「鏡の間」は想像していたよりも広く開放感があったように思います。そこから見た庭園の景色も素敵でした。天気がよけれ 走りだしていたのではないかと思います。

## ●11/22(月) 7日目(機中泊)～

### 11/23(火) 8日目

### シャルル・ド・ゴール 港から

### ヒースロー 港へ

いよいよ帰国。帰るのがとても惜しかったです。せっかく日本をでてきて、ヨーロッパにいるのだから、ヨーロッパの他の国にも行きたいと思ったし、ロンドンに戻ってまた観光したいとも思いました。少し重

量オーバーしてしまったトランクを追加料金を払うことなく預けて搭乗。機内が肌寒かったので客室乗務員さんに声かけ。

私 “Excuse me? Please a blanket because I feel cold.”

CA “Sorry, we haven't it.”

こう言われたにも拘らず、数分後同じ乗務員さんが “Here you are.” とブランケットを持ってきてくれたのは、会話ができたことと合わせてとてもうれしかったです。

### ヒースロー 港から成田 港へ

空港では、ユーロをすべてポンドに替え、最後のショッピングをしました。大袋のお菓子やハロッズで熊のぬいぐるみなどたくさん購入しました。

機内では、今回仲良くなったネパール人のロサンクんと並んで座り、今回の研修のことやネパールのこと・兄弟のことなどいろいろな話を話しました。彼は多くの国に旅行していて、私ももっといろいろな国に行ってみたいと強く思いました。1回目の機内食が昼食だったのに2回目は朝食で、日本に近づいているんだと思いました。

### 帰 国

ついに帰国してしまいました。入国審査の時に思わず “Hello!” と言ってしまいそうになり笑ってしまいました。荷物を受け取り税関も通過。友達はお迎えが来ている



トランクのお土産たち

---

なか、ひとり電車に乗り、なんとか我が家に帰宅しました。途中で喉が渴いた私は、自動販売機の緑茶ボタンを迷わず押していました。

### まとめ

まとめとして、私は今回の海外スクーリングに参加して本当によかったと思っています。単に外国に行けたという満足感もありますが、英語に埋もれて生活したこと、たくさんの世界的な文化遺産に触れたこと、どれも貴重な経験で、今後海外旅行をしてもまた同じ気持ちを味わうことはできないでしょう。

一番の収穫は、日本は素晴らしい国だと改めて実感できたことです。例えば、街の環境。緑豊かな広い公園があったり、きれいに区画された通りにクラシックな建物が並んでいる景観は、日本ではあまり見られません。ロンドンもパリもとにかくゴミが多かった！ 道行く人が何事もなかったかのようにゴミを捨てそのままにしている様子、そのゴミを雇われているであろう清掃員が掃除していることが、せっかくの美しい景観を台無しにされていて、とても残念でした。

サービスもそうです。なかにはフレンド

リーで優しい方もいましたが、ガムを噛んでいたり、ケータイをいじっていたりしている人がいたり、レストランでは商品の出し間違いを謝ってくれないこともあり、日本のサービスは本当に親切・丁寧だと初めて感じ、アルバイトをする時にさらに高めていきたいなと思いました。また交通の秩序があまりにもないことにも驚きました。

このように、日本には日本の、外国には外国の文化や習慣があることを肌で感じることができました。日本のことでもまだまだ知らない伝統や文化がたくさんあると思います。外国のことはなおさらです。今回の経験を糧に、もっと視野を広げて、日本を、世界を見ていきたいと思います。そして、できるだけ多くの国に行ってみたいと思います。

最後になりましたが、今回のスクーリングで引率して下さった織井先生・有馬先生をはじめ、支援室の佐藤先生、旅行会社の方、資金を援助してくれた両親・祖父母、携わったすべての方に感謝いたします。素晴らしい経験をありがとうございました。

### 〈参考文献〉

地球の歩き方 ロンドン／パリ(ダイヤモンド社)  
その他、現地のパンフレット

# 学生たちの■ンドン・パリニ都物語

海外スクーリングで学んだこと

地域こども教育専攻1年(2010年参加時) 高橋 知実

私は、11月16日から23日までイギリス(ロンドン)・フランス(パリ)に海外スクーリングに行ってきました。海外で見えてきたすべてのものやすべてのことが、新しく、輝いて見えました。そのなかで、特に私が印象に残った場所をそれぞれの国から1カ所ずつ挙げて、レポートにまとめました。

## 1 ウェストminster 寺院

私たちがウェストminster 寺院を訪れた時、最初に目に入ったものは、ゴシック様式建築の大きな建物と、多くの国王や詩人・海軍のお墓、紙で作られたたくさんの赤いポピーの花です。その光景はとても綺麗で、一緒



### ◆ ウェストminster 寺院の歴史 ◆

960	最初のベネディクト派修道院の修道士が、後にウェストminster となるソーニー島に移住
1065	12月28日、エドワード懺悔王により聖別
1066	クリスマスの日ウィリアム征服王の戴冠式(最初の戴冠式)を挙行
1245	ヘンリー3世が、再建(現在の教会)に着手
1301	戴冠式用の椅子が製作され、1308年よりすべての戴冠式で使用され今日に至る
1400	ジェフリー・チョーサーを南翼廊に埋葬
1503	ヘンリー7世が聖母礼拝堂の建設に着手
1540	ヘンリー8世による修道院の解散
1560	エリザベス1世により、聖堂参事会管轄の教会(司教座のない教会)となる
1745	西塔が完成
1920	身廊に無名戦士を埋葬
1953	女王エリザベス2世の戴冠式が挙行される
1997	ダイアナ妃の葬儀が執り行なわれる
2002	エリザベス2世の母エリザベス王太後の葬儀が執り行なわれる





に海外研修に来ていた友達と会話をするのも忘れてしまうぐらい、幻想的なものでした。

ウェストミンスター寺院は、祈祷と礼拝を日々繰り返し実践する教会で、高くそびえるアーチ型の天井は神の想像を超えた偉大さの象徴だそうです。

寺院に入ると、素敵なステンドグラスが壁の前面や側面にありました。光が当たり美しく反射していたステンドグラスの美しさを、私はこれから先ずっと忘れません。

そして1人1人に日本語の音声ガイドをもらい建物内を見学していき、エリザベス1世とメアリー1世のお墓・シェイクスピア・戴冠式用の椅子などを初めて自分の目で見ました。実際に自分の目で見たということは、それらの歴史について深く知れたということでもあり、とても良い経験になりました。

ウェストミンスター寺院には「与える」という伝統があり、完全に独立採算で運営されているそうです。国・国王あるいは英国国教会より一切の財政援助を受けていないということでしたが、今でもあのように残っているのは、ウェストミンスター寺院がイギリスの人々にとって偉大な建物なのだということを実感しました。

## 2 ルーヴル美術館

次に海外スクーリング2カ国目の、フラン

スで印象に残った場所、ルーヴル美術館についてです。

ルーヴル美術館のこのピラミッドは「ダ・ヴィンチ・コード」という映画で見たことがあったので、とても感動しました。ルーヴル美術館のなかに入る前に荷物チェックなどを行ないました。世界的に有名なものがたくさんあるので、セキュリティーは万全でした。

このルーヴル美術館では、私が一番印象に残っている「ミロのヴィーナス」と「モナリザ」について紹介したいと思います。

### (1) アフロディーテ：

#### 通称「ミロのヴィーナス」

ミロのヴィーナスは1820年、キクラデス諸島の南西の島、メロス島（現代ギリシア語でミロ）で発見されました。リヴィエール侯爵はこの作品をルイ18世に献上し、後者は翌年ルーヴル美術館にそれを寄贈しました。この作品はその当時より名声を得て、主に2つの大理石のブロックで構成されたこの彫像は、別加工された複数の部分によりできていて、はめ込み部品の技術を使い、上半身、両脚、左腕、左足などは、縦はめ込みにより結合されています。

この女神は謎に包まれており、その仕草もまた解読不可能と言われています。不足する部位と象徴物の欠落は、この彫像の復元と識別を困難にしています。そしてその仕草は、さまざまな憶測を呼び起こしました。またこの作品はミロ島で崇拝されていた海の神、アン



フィトリテの可能性もあるそうです。

(2) フランチェスコ・デル・ジョコンドの妻  
リーザ・ゲラルディーニの肖像：  
通称「モナリザ」

「モナリザ」の歴史はいまだ闇に包まれています。モデルの素性、肖像画の発注、レオナルドが制作にかけた時間、さらには画家が作品を保有していた期間、そしてフランス王室コレクションに収蔵された経緯、これらすべてがいまだ明らかになっていない事柄です。

描かれているモデルの微笑は、彼女の「アトリビュート（持物）」となっています。ネズの木の花がジネヴラ・ベンチ（ワシントン）の白テンがチェチリア・ガッレラーニ（クラクフ）のものであるように、微笑みはリーザ・デル・ジョコンドのものであり、それは「ジョコンダ」という語のなかにも含まれている幸福の観念を写し出しているそうです。レオナルドは、この観念をその肖像画の本質的なモチーフとしており、それがこの作品のもつ理念的な意味合いの理由となっています。

風景のもつ特徴もそこに寄与しています。「モナリザ」の胸元と一致する背景の中線の高さ、暖色調の色合い、そして蛇行する道



と橋があることから人間の存在が感じられる風景は、モデルのいる空間との移行を可能にしています。

一方、背景においては、風景が

厳然たる岩と水でできた、生のままの自然の光景へと変化しながら、賢明にも視線と一致させた水平線のあたりへと消え入っているのを、レオナルドは表わしたそうです。

日本でも有名なこの2つの作品は、テレビなどで見たことがあっても、その歴史は調べようと思わない限り、なかなか知る機会がありません。実際に訪れたことで知る機会を得た私は、本当に幸運だなと思いました。

### 3 まとめ

今回、海外スクーリングに参加させていただいたことは私自身の成長に大きくつながり、海外と日本の文化の違いを改めて実感することができました。

普段私たちは日本語を使い、何も不自由なく自分の気持ちを自分の思ったとおりに伝えることができます。しかし実際に外国に行き、感じたことは、思ったことが伝わらないもどかしさと、自分の英語力のなさでした。その悔しさから「もっと英語が話せるようになりたい」と心から思いました。次にどういう形で海外に訪れる機会があるかはわかりませんが、その時までにもっと英語を勉強し、話せるようになろうと思いました。

最後に海外スクーリングは私にとって本当にいい経験になりました。引率して下さった織井先生・有馬先生、海外スクーリング関係者の皆様、ありがとうございました。

#### 〈参考文献〉

- ウェストミンスター寺院：  
<http://www.westminster-abbey.org/>
- ルーヴル美術館日本語サイト：  
<http://www.louvre.fr/jp>

## 温かい交流と異文化体験を通して学んだこと

国際学部こども学科 准教授 山本 陽子

2011年10月、学生10名（国際学専攻3年1名・地域こども教育専攻2年9名）とシンガポール海外スクーリングに行きました。海外スクーリングは、毎年欧米地域とア

### ◆ シンガポール海外スクーリング ◆

月 日	主なスケジュール
10/15(土)	深 夜：東京（羽田空港）発
10/16(日)	早 朝：シンガポール（チャンギ空港）着 午 前：JTB観光ツアー マーライオン、植物園、サルタンモスク、マウントフェーバーリッジ等 午 後：15：00チェックイン後、ホテルにて翌日のメイフラワー中学校での発表の練習
10/17(月)	午 前：メイフラワー中学校訪問 学校施設見学、英語授業参加、「東日本大震災について」英語で発表 午後～夜：シンガポール・マネジメント大学 大学内キャンパスツアー、日本文化クラブ学生との交流 一街歩き、ショッピング、夕食、おしゃべり
10/18(火)	午 前：シンガポールワタミ 社長 栗原聡氏の講演、歓談と昼食 午 後：ショッピングセンター見学 ネ・ウォーター（海水淡水化施設）見学 夜：自由行動（マリナ・ベイサンズ見学or買い物）
10/19(水)	午 前：ヘイ牧場（山羊乳牧場）見学 昼～午後：ナンヤン理工大学 大学構内バスにてキャンパス見学、フードコートで各国料理昼食、ビジネス専攻・日本文化クラブ学生との交流 一折り紙、名前を漢字で表現、人探しビンゴゲーム、課題解決学内探検ゲーム 夜：シンガポール（チャンギ空港）発
10/20(木)	早 朝：東京（羽田空港）着

ジア地域の2方面を実施するという計画のもと、海外にフィールドをもつ教員が企画・引率していく形での実施が多いのですが、シンガポールは引率する私にとっても未知の場所でした。

シンガポールは、多国籍企業の拠点が置かれ、独自の教育システムで質の高い教育を実施していることで知られています。

今回の実施においては、株式会社リバナスの全面的なご協力をいただきました。異なる文化に触れ、その地に暮らす人々と交流することを通して、グローバルな視点でこれから必要とされる国際人のあり方を考えること、学生がこのスクーリングを通して、学生自らが考え行動するためのきっかけとすること、の2点を確認し、現地での具体的な訪問場所等の計画はすべてリバナスにお任せしました。

リバナスのシンガポール出身アンドリュー・ガン氏のコーディネートにより、充実した研修ができました。

特に現地2日目のメイフラワー中学校訪問では、中学校の施設見学、授業参観の後に校長先生はじめ多数の先生方や生徒たちを前に「東日本大震災」について、英語で発表を行ないました。夏休みの事前研修会から出発直前まで準備をしてきた今回のスクーリングの目玉ともいえる活動で、震災について事実を話すだけでなく、この震災で学生自身が体験したこと、震災で感じたこと、考えたことを自分の言葉で伝えることを目指しました。

- A 震災当日のディズニーランド周辺の様子・液状化
- B 震災による日常生活の変化・インフラ
- C 震災後の生活の変化、半年経った被災地

の3つの柱を立てて、それぞれグループに分



メイフラワー中学校での発表前の緊張

メイフラワー中学校では東日本大震災についての発表をしたが、この話を聞いたときには正直戸惑った。シンガポールに地震はなく、そもそも自分たちの英語力でシンガポールの中学生たちに、自分たちが東日本大震災で経験したことや伝えたいことを思うように伝えることができるのかという不安感ばかりを抱いた。しかし、自分たちで努力し先生方のお力添えもあり何度も原稿を読むなど苦勞した甲斐もあって、本番の発表はうまくいったのではないかと思う。実際にこの発表を通じてメイフラワー中学校の生徒たちに、なにがしかのことは伝えられていたのではないかという手ごたえを感じることができた。

(地域こども教育専攻2年 高橋 一晃)

かれて発表しました。事前準備の段階で英語面では佐藤佳子先生、現地の前日練習ではリバナスの徳江さん、アンドリューさんにご助言をいただきました。

間際になって敬愛大学についての説明が必要ということで、急遽私も英語の原稿とパワーポイントを作製して当日に臨みました。学生たちは、堂々と発表し、中学生や先生方に自分たちの思いを伝えることができました。

現地3日目には、シンガポールワタミ社長、栗原聡氏（42歳）から、ご自身の学生時代の体験談や海外進出が続く外食産業の現状

メイフラワー中学校で『東日本大震災』について英語で発表するというので私たちは皆、緊張していました。しかしメイフラワー中学校に到着し現地の中学生に会って、現地の中学生が「こんにちは」と日本語で言ってくれて緊張が少し和らぎました。そこからは「この機会を無駄にしてはいけない」と思い直し、英語で中学生たちに話しかけていきました。まずは校内を案内してもらい、中学1年生の英語の授業を見せてもらいました。そこではグループになって班ごとに傘やネクタイなどの物をお題とし、擬人法などを用いて詩を作るという内容でした。現地の中学生な単語力や発想力に圧倒されながら授業を見学しました。その後、場所を移動して私たちの発表をしました。

発表の前日にこのプランを企画してくれたリバネスの徳江さんから「原稿を読んでいる最中、何回かいいから顔をあげてみよう」と言われたので、その点を意識しながら行かない、練習したなかでも一番上手かった発表だったと思います。発表が終わり中学校で用意してくださった昼食をいただき、メイフラワー中学校でのプログラムを終えました。帰る際には、私たちと関わった生徒たちはもちろん、関わっていない大勢の生徒たちも見送ってくれました。生徒たちの温かい気持ちが心の底から伝わってきて、すごく感動しました。

(地域こども教育専攻2年 高橋 知実)

をショッピングセンター内の「ワタミ」のお店でうかがいました。その後なごやかな雰囲気なかで、ランチをメニューから各自選んで歓談しながら会食しました。

社長からは「目標を持つ」ことの大切さなど学生に有益なお話をたくさんいただきました。

このほかにも、淡水化施設や山羊牧場の見学など、シンガポールという国の特徴的



シンガポール「ワタミ」社長と

な企業の訪問もしました。それぞれの場で学生たちはさまざまな見聞や経験をし、多くのことを感じることができました。

学生たちが今回のスクーリングで一番印象に残ったのは、現地2日目午後に行ったシンガポール・マネジメント大学と現地最終日のナンヤン理工大学の、2つの大学の施設見学や現地学生たちとの長時間にわたる交流だったようです。

兵役があるシンガポールでは、男子学生のほうが女子学生より平均2年年長であること、自分や国の未来に対して明確な目標を持っていること、英語・中国語はもちろん日本語までも堪能なこと、真剣に学んでいる実際の授業の様子を見学できたこと、施設・設備のすばらしさ、心から歓待してくださったこと……。

ほぼ同じ年齢同士の交流は帰国後も、フェイスブックなどで続いているようです。

今回のシンガポールは私にとっても初めての地であったので、学生と同じ目線で現地に触れることになりました。

シンガポールは、地震も水害もないという自然条件に恵まれた立地にあり、古くから交易の中心として栄えてきました。高層の建築物はそれぞれとてもユニークな形をしていて、特に3つの高層ビルの屋上に舟形の大きなプールを横断させた「マリナ・ベイサンズ」はその大きさ、何よりも超高層



ナンヤン理工大學生との交流

ビルに船を渡すという発想に驚かされます。国土は琵琶湖ほどの広さ、決して天然資源に恵まれているとはいえないこの小さな国が世界でもめざましい発展を遂げているのはなぜなのでしょう。現地の学生たちの目はそれぞれの未来に向かって輝いていました。

シンガポールの人たちの温かい心遣い、たくさんのすばらしい出会いのなかで、参加した学生たちは異文化と出会い、現地の企業や産業にも触れることができました。

折り鶴を折っている最中、シンガポールについて色々聞こうと思い、知っている単語で語りかけると理解してくれ、向こうも日本語で返してくれました。自分の言ったことが相手に通じたことも、相手が頑張って日本語で返してくれたこともうれしかった。

私は消極的で自分からはあまり話そうとは思いませんが、シンガポールに行きたくらいのことがたくさんあり、自分から話そうと思えば積極的に話すようになった。そのおかげで友達もできたし、少し自分を変えられたと思う。短い期間でしたがいろいろな所へ行き、たくさんの人と出会え、貴重な経験ができた。今度海外へ行く時は事前に行き先の国の文化や言語を勉強するなど準備をしてから行きたい。

(地域こども教育専攻2年 大坂 翔太)

海外スクーリングを通して学んだことはたくさんありますが、なかでもこれからも大切にしたいと思うことが2つあります。

1つ目は「笑顔」です。私は現地の学生と交流するとき英語力に自信がないのと人見知りなので、友達の影に隠れていました。学生の方と目が合った時とっさに笑ってごまかしてしまいました。しかしそれがきっかけで、私は積極的になることができました。私は英語で話しかける勇気がなかったので、交流するきっかけを作れなかったのですが、ニコっと笑ったことで相手も笑顔で手を振ってくれて、私のところに寄ってきてくれたのです。笑顔が交流のきっかけになることに気付いたことが私にとっての大きな一歩となりました。世界にはたくさんの言語がありますが「笑顔は世界共通なのだ」ということを感じ、スクーリング中はどんなときも笑顔を忘れないようにしようと思いました。

2つ目は「伝えようとする気持ちさえあれば、言葉の壁は乗り越えられる」ということです。本当に英語が苦手な私は、片言の英語で、文法などはめちゃくちゃです。でも諦めずにジェスチャーを取り入れたり、知っている単語を並べてみたり、自分のできる限りのことを一生懸命やれば時間はかかりましたが、自分の言いたいことや伝えたいことがきちんと相手に伝わりました。英語が得意・不得意が大事なのではなく、「伝えたい」という強い気持ちが大事なのだと思いました。

(地域こども教育専攻2年 三宅 茜)

これらの体験はこれからの生活に有形無形に影響していくと思います。今回の海外スクーリングは、現地の学校見学、学生との交流、企業訪問など、(株)リバネスのきめ細かい計画で実施され、海外スクーリングの目的を十分に達成することができました。

シンガポールでは中学校や大学に行き、いろいろな学生と交流した。シンガポールの学生に共通していることは、勉強に真剣に取り組む姿勢であり、見て感じ取れたし、話をしても感じる事ができた。私は英語はできないけれど、相手の目を見て話を聞くことでその雰囲気を感じる事ができた。日本ではただ勉強して大学に行くと目的意識が薄れて ざしているが、シンガポールの人は、将来の目標を強く意識し、今を一生懸命生きていると感じた。

シンガポールのスクーリングに行くと、日本は豊かで恵まれていることを改めて実感した。もっと自分は苦しい環境で努力しなければ駄目だと思った。

(地域こども教育専攻2年 生山 祐介)

大学の授業の一環としての海外スクーリングは、単なる観光旅行とはまったく異なるものです。多感な学生の時期に海外の空気に触れ、実際そこで生活している人たちと交流して、その文化を直接感じることの意義は非常に大きいことを学生とともに行動するなかで、実感しました。

一人でも多くの学生が学生時代にぜひ一度は海外スクーリングを体験できるような仕組みが必要だと思いました。



マリナ・ベイサンズ

## シンガポールスクーリングに参加して

国際学専攻3年 中本 小百合

シンガポールに行く前は、滞在することになるホテルのことから語学力のこと、精神的なことまでいろいろな不安材料が頭をかすめていました。初日は観光メインだったのである程度想像できたのですが、その後の日程に関しては「どうなるのだろう……」と暗く考えていました。

実際には“北京語が通じる環境”でなら、ある程度上手くやっていけるかもしれない！ という感触を得ることができたので、社会人になってからのビジョンにも有効な経験ができたのではないかと思います。

今回のスクーリングに参加することで「シンガポール」という国に対しての“距離感”が縮まったと思います。

理由としては、“初上陸”の国に滞在し、現地の学生や企業の方と交流するなかで、シンガポールと日本との文化や認識の違い、教育、税制諸々について聞くことができたからです。印象的だったのは、所得が2万シンガポールドルに満たなければ所得税が免除されることと、大人よりも学生のほうが癖のない綺麗な発音で英語を話していたことです。

特にシンガポールの英語教育は日本とは違い、まんべんなく英語力がつくようにカリキュラムが組まれていましたし、実際に交流させていただいた学生の皆さんも、実践的な英会話力がほぼ皆無な私たちにも分かりやすく易しい言い回しをしてきていました。

私自身にとっては、「英語力を鍛える機会」

というより「どこまで自分の中国語レベルでいけるのかを試せる機会」でした。

勉強のなかで鍛えられていく学生のほうが、社会のなかで実践力を磨いていく大人たちよりも綺麗な発音をしていたことは、欧米などの英語圏とは異なる環境の「準英語圏」の国々にも当てはまるように思います。また、シンガポールが多民族で構成される『サラダボール』とも例えられるような国家であるからこそ、“英語”という共通語が日常生活で多用されていく環境となり、そこに暮らす人々の実践力も日本人とは比べるべくもないのではないかと思います。

今回のスクーリングは、私自身のことを含め、いろいろと発見がありました。

今回の滞在で得られた発見が、諸外国にも“詰まっている”のだと思うと、新たな国を旅することも悪くないと思いました。

今後は身近な国だけでなく、“行動範囲”を拡げていこうと思います。



マリナ・ベイサンズ屋上からの夜景



## シンガポールで感じたこと

地域こども教育専攻2年 高橋 優太

私は海外に行くのはこれが初めてだったので期待を胸に抱いて行きました。たくさん書きたいことがあります。絞って書いていきたいと思います。

1つ目はコミュニケーションです。シンガポールの公用語は英語で、こちらは日本語、発音やアクセントも違うし、通じるかどうかとても不安でしたが、短い会話でゆっくり言えば相手が理解してくれました。

研修のなかに、2回シンガポールの大学生とかかわる機会がありました。シンガポールの学生は日本に興味がある方々で、私たちが来るといことで日本のことや日本語を勉強してくれていました。自分たちはシンガポールに行くのに、シンガポールのことについて全然勉強していなかったのだからこういうところは学ぶべきだと思いました。シンガポールの大学生は私たちにとても親しくしてくれました。シンガポールに来て改めて人の繋がりの大切さが実感できまし



ヘビを首に巻いて

た。日本に帰っても繋がりの大切さを考えながら生活していきたいです。

2つ目は文化の違いについてです。日本とシンガポールではたくさんの違いがありました。まずは食べ物です。シンガポールはさまざまな人種の方々がいるので食べ物の種類がたくさんありました。しかし味付けが日本とは違うので、自分はどれも美味しくいただけましたが、味に敏感な人はきついと思います。また料理や飲み物のサイズが大きくて驚きました。日本の倍ぐらいあり、もの凄く印象に残りました。

シンガポールの気候は1年中夏の気候なのでとても暑かったです。そして雨がゲリラ豪雨みたいに降るそうですが、私たちがいる間は全然雨が降りませんでした。また、シンガポールの人たちはけっこう大雑把な感じがしました。注文すると勝手にトッピングが増えていたり、蛇に触っただけでお金をとられたり、日本では普通にありえないことがシンガポールでは起きました。これも自分にとってはいい勉強になりました。シンガポールは地震がないので、建物を高く建てられるという利点があり、夜景はとてもきれいでした。

3つ目は教育についてです。なかなか他の国の教育現場を見る機会はありません。そのなかで、シンガポールの中学校の授業を見学できたのは小学校の教員を目指している自分にとって一番興味がありました。教

科は国語です。英語なので意味をよく理解することはできませんでしたが、貴重な体験になりました。

この海外スクーリングを通してさまざまなことを学び、いろいろなことが体験できたと思います。この体験で自分の世界観は狭かったと感じました。もっといろいろなものに興味を持つことで自分を成長させら

れると思います。この海外スクーリングにはたくさんの方がかかわっています。たくさんの方がかかわってくれたからこそスクーリングが成功したと思います。このかかわってくれた人たちに感謝の気持ちを忘れずに、この経験を生かして自分の人生を切り開いていきたいです。



ナンヤン理工大学交流最後の記念写真

## 自分のなかの変化

地域こども教育専攻2年 渡辺 澄菜

私は今回のシンガポールスクーリングを通して、自分のなかで変わった点が2つあります。

1つ目は、海外への興味です。昨年、友達がヨーロッパへスクーリングに行ったことを祖母に話した時、「海外へ行く機会を大学で設けてくれるなら、来年行ってみたらどう？」と言われました。その時は正直、「教師になるのが夢なのだから、海外へ行こうが関係ないだろう」「授業を休むくらいなら行かなくていい」などと思っていて、海外スクーリングへの興味は、この時点ではないに等しい状態でした。しかしシンガポールスクーリングの説明を受け、私的な旅行では決して経験できないようなプランに興味をもち、両親に相談してみたところ「行っておいで」と言ってくれたので、参加することにしたのでした。

シンガポールへ到着、現地の人々や気候、光景などすべてが日本と異なっていて、海外へ来たのだという実感が一気に湧きました。

1日目はシンガポールの主な観光場所を回り、高層ビルが立ち並ぶ街並みや芸術的な造りの建造物などを見て心が弾みました。小さい国ながらも日本に劣らず先進的であることに驚いたとともに、その経済力はどこからくるものなのかについて興味をもちました。

2日目に訪れた中学校では、校内を見学し

たり、国語の授業に参加したりしてシンガポールの教育現場を目の当たりにし、日本の教育との違いを感じたとともに、ここでもシンガポールの先進的な一面を見ることができました。それは、コンピューターで合成映像を作ることができるスタジオがあることや、理科の実験室が4つもあることなどです。生徒たちが普段どのように利用し、その教室がどのように役に立っているのかをもっと見てみたいと感じました。

このように、当初は海外へ行くことにあまり興味がなかったけれど、今ではさまざまな国へ行ってみたいと思う理由がたくさんできました。シンガポールに到着した時に日本とは違う印象をもったように、他国へ行けば新しい発見をしたいと思います。そしてそれは人生経験を豊かにしてくれるでしょう。また、シンガポールだけでなく他のさまざまな国の教育状況を知ることで、日本の教育現場で実践できることの幅を広げることができるでしょう。そのためにも他のさまざまな国へ行っていろいろな発見をし、多くのことを感じてみたいと思いました。私がこのような考えをもつことができるようになったことがスクーリングを通しての収穫であり、以前と変わったことだと言えます。

2つ目は、コミュニケーションに対する考え方です。日本語が通用しないシンガポールでは、コミュニケーションがいかに大切

であるかを実感しました。日本を出発する前は、今まで習ってきた英語がどこまで通用するか試してみたいと意気込んでいたものの、いざ使おうとすると焦ってしまって、すぐに返事ができないときもありました。

しかし、対話の際にいつも心がけていたことがあります。それは「話は目で聴く」という、中学時代の担任の先生がいつも言っていたことでした。相手の目や口の動き、表情などから伝わってくるものすべてが情報となるため、目で聴くコミュニケーションの取り方も非常に大切であると実感しました。

また、私は普段話すよりも聞くほうが多いため、自分から話をすることにあまり慣れていなく、そのうえ人見知りの部分もあるため出発する前までは現地の人々との交

流に不安を感じていました。しかし、シンガポールで実際に交流をする機会が増えるにつれ、「自分の気持ちを伝えたい」「相手のことをもっとたくさん知りたい」という思いが強くなったことで、自然と壁を壊してオープンに話せるようになりました。言葉だけでなく、笑顔などの表情やジェスチャーを使ったコミュニケーションも大きく関係していました。これらのことから、コミュニケーションの大切さを以前よりも強く感じるようになったことも自分のなかでの大きな変化でした。

今回のスクーリングを通して得たものはたくさんあります。参加したことに後悔はなく、とても楽しくて充実した旅行でした。この経験をこれからの生活に生かしていきたいと思います。



マーライオンの前で

## 英語で通じたい!

地域こども教育専攻2年 鈴木 彩美

3泊5日の海外スクーリングでシンガポールに行ってみての自分のなかでの一番の変化は、外国や外国人に対する意識です。私にとってこのスクーリングは初めての海外だったので、映像や写真でしか知らなかった外国の地に足を踏み入れたことは、感動と衝撃でいっぱいでした。

普段日本で生活していると、生活環境の良さや生活水準の高さから特に不便を感じることもないし、使う言語も母国語である日本語だけなので異文化に触れる機会はほとんどありません。しかしシンガポールは他民族・多文化国家なので、使われる言語も中国語に英語に方言の訛りまで混ざってきます。しかもさらに驚いたことは、シンガポールの現地の人ほとんどが中国語と英語の2カ国語を自由に使い、第3外国語まで勉強しているという点です。

小学校のころから英会話を習い、英語が一番好きな私は、今回のスクーリングで自

分の英会話力が本場ではどれくらい通用するのかを実践して確かめることが目的の一つでした。小・中・高で習った簡単な英語をリスニングテストのような感覚で聞きとることはできても、普段日本語に囲まれた生活をしている私は、英語で自分の意志を発信することに慣れていません。会話のようなすぐに返答が必要となる場面では簡単な英語の文でさえ即座に組み立てられない自分の実力のなさを身をもって感じました。

そんななかでも、シンガポールの現地の人々と話したり接したりすることを通して、自分の意志を伝えることや挑戦してみることの大切さを学ぶことができました。英語で何かを伝えたいけれど文として発信することができないとき、私が絶対に伝えてみせるという気持ちで単語だけでも必死に言葉にすると、それに応えて理解しようとしてくれるシンガポールの人々の温かさも感じることができました。新しい環境におかれても自分の意志をもってそれを相手に伝えることができると、自分の力で困難を乗り越えられるということが分かり、今後社会に出るときの自信にもつながりました。

メイフラワー中学校で東日本大震災についての発表をしたときも、相手方は真剣な顔で話を聞いていてくれました。シンガポールは日本と異なり、地震がまったく発生しない土地なので高層かつ不安定そうでユニークな形の建物がたくさんあります。そ



初日チャイナタウンでの夕食

んな街並みを見て、それぞれの国を取り巻く環境がその国の街並みを形作る一因になっていると思うと、シンガポールだけでなく他の国の様子や環境、歴史などの関連性についても学んでみたいと思いました。

現地の人々が教えてくれるさまざまな知

識をひとつでも多く吸収するためにも自分の英語力をもっと伸ばしたいと意識も向上したし、大学生活のうちに様々な国に足を運んでみたいと思えるようになったので、本当に良い経験ができたと思っています。



シンガポール・マネジメント大学の学生たちと

## シンガポール

地域こども教育専攻2年 葛馬 敏道

今回の海外スクーリングは発見と驚き、そして感動とさまざまな経験ができ、自分自身を大きく成長させてくれたものでした。

シンガポールは英語圏なので、出発前に英語の本を買い、ある程度使いそうな言い回しはインプットしていきました。羽田空港を出発してシンガポールのチャンギ空港について、思い切って「グッドモーニング」と税関の方に話しかけてみたところ、「グッドモーニング」と返してくれたときはとてもうれしかったし、新鮮でした。小学校で習う簡単な挨拶でも自分で話した英語が通じるのはこんなにもうれしいものだと知りました。また、市内観光で見た世界遺産のマライオンは小さいながらも感動しました。

メイフラワー中学校では、生徒たちが元気よく迎えてくれました。生徒たちは日本語の辞書を片手に、時折簡単な日本語を使いながら学校を案内してくれました。私た



2階建てバスの車内で

ちを快く歓迎してくれて、私たちのために日本語を勉強して少しでも気持ちを伝えようとしてくれたことに、私は感動しました。

中学校だけでなく大学にも行きました。SMU（シンガポールマネジメント大学）とナンヤン理工大学の学生さん方も快く迎えてくれました。大学生で自分たちとそう遠くない年齢ということもあり、すぐ打ち解けた気がしました。日本語で自己紹介してくれ、日本のことにとても興味をもってくれて、いろいろなことを聞いてくれました。とてもうれしかった反面、自分は日本人としてみられているという、日本人であるということの責任を感じました。日本にいるときも決して忘れてはいけない責任を再確認した瞬間でした。そしてここでも言葉は通じなくても、気持ちがあれば言いたいことは通じるということを改めて感じました。日本語が通じない、英語が理解できない。しかし知っている簡単な単語を並べたり、身振りや手振りで言いたいことを伝えようとすれば、相手はそれを理解しようと努力してくれます。逆も同じです。その気持ちが通じ合った時、お互いのことが理解できるのだと思いました。

露店街で買い物をしたときには、簡単な英語で値切ることもできました。気がついたら通じるかは別として、自分から積極的に英語を使っていました。そんな片言の英語でタクシーに乗って目的地に行くことも

できましたし、道を聞くこともできました。両替だってすることができました。いろんな経験をすることができました。

また、異文化に触れた時、拒否するのではなく、むしろ積極的に理解しようとする態度が大切だと思いました。さらには異文

化や宗教、歴史、言語などを自国と比較し、自分の意見を持ち、共感できることが大切だと思いました。将来教師になった時、将来を担う子供たちには、国際社会に対応できる資質を育ててあげられるよう努力したいと思いました。



貴重な体験を胸に帰国



国際学科では、1年次に「房総の歴史と自然/環境」、2年次に「千葉の経済構造」、そして3年次は「千葉の経済特殊」の授業を開講しています。これら3つの講義は、学生たちに千葉県の自然・環境、経済活動について学ぶことにより、今まで以上に千葉県への関心を持ってもらいたいとの思いから設置されました。

千葉県には、空の玄関として成田空港が旅客だけでなく、日本の輸出入航空貨物の3分の2を取り扱い、海からは市川市から袖ヶ浦市まで延びる日本最大の千葉港を經由して、さまざまな原料や製品が貿易されています。また、湾岸地区には多数の倉庫が存在し、首都圏における最大の物流拠点となっています。

したがって「千葉の経済特殊」では、県内でこれら国際ビジネスを展開する企業の経営者から直接お話をさせていただき、事業内容についての説明だけでなく、やがて社会人となる学生へのメッセージも頂戴し、将来の就職活動の参考にして欲しいとの願いもあります。また、一部の会社については、工場見学も実施しました。

受講した学生にとっては、経営者からの迫力あるお話に感銘し、印象に残る授業となっているようです。2011年度は、4社の経営者による特別授業を行ないましたので、それぞれの講義に対する受講生のまとめた感想レポートを、以下のとおり紹介します。

#### 第1回目 [10月12日(水)]

講師：成田国際空港(株) 林田 秀喜 常務  
「千葉の成田空港について」

国際学科3年生 伊原 采佳

千葉で生まれ、千葉で育った私でも成田空港について詳しくは知らず、「成田空港」=千葉県にある空港で、国際線といえば成田空港、旅行の時しか利用しない

場所というイメージでした。今回、成田国際空港(株)林田常務のお話を伺い、空港の成り立ち、周辺地域との関係、空港の目指していることなど、色々学びました。

そのなかでも、貨物に力を入れていることが、強く印象に残っています。貨物の乗り入れ会社は72社あり、就航先都市数は93都市(36ヵ国3地域)、国際航空貨物取扱量の全国シェアは66%、世界ランキングでは7位であることには驚かされました。現在私たちの生活で使っている物のほとんどは、海外で生産されるとか、あるいはその原材料が輸入されています。それらのすべてが成田空港を經由している訳ではありませんが、自分の使っている物が、一部でも成田空港を通じて自分たちのところに届いているのだと考えるだけで、成田空港は千葉県にとっても日本にとっても重要な場所だと思います。

また、世界には多くの空港がありますが、そのなかでも成田空港が7位というのは素晴らしいことでもあるし、単なる人だけを運ぶ場所ではなく、貨物を運ぶための場所でもあるのだと認識しました。

空港周辺の物流施設は40社、44ヵ所もあり、空港内だけで物を取り扱っているの



林田 秀喜 常務

ではなく、空港周辺も利用して、地域とともに大量の物流を効率よく行なっているのだと感じました。

今まで成田空港は「遠い・狭い・高い」とイメージされていましたが、徐々に改善され、通路など無機質な空間になりやすい場所に職人の技を展示して、「和」的空間を設けている事例の紹介もありました。空港を利用したお客様が最初に日本の文化に触れることができ、日本の伝統技術のすごさをアピールすることができるのは素晴らしいと思います、私も空港に行ってみてみたいと思います。

これまで成田空港には1~2回行った記憶はありますが、飛行機に乗るための場所という視点でしか見ていませんでした。これからは貨物も取り扱っている場所、お客様が利用しやすいように日々努力されている場所など、色々な視点から成田空港を見たいと思います。

## 第2回目

[11月2日(水)]

講師：千葉共同サイロ(株) 内藤 常男 社長

[11月9日(水)]

同社工場見学(千葉市美浜区)

### 「千葉共同サイロの講義と見学を終えて」

国際学科3年生 齊藤 佳予子

インターンシップ報告会を通じ、千葉共同サイロの仕事内容については大体分かっているつもりでしたが、今回の講義により小麦の保管取扱量が日本一と聞いて驚かされました。そのような素晴らしい会社の社長さんが大学で講義してくださり、また会社見学までさせていただけたことはとても光栄なことだと思います。

講義を聞いて印象に残った言葉は、「現場力とは想像力と創造力」です。その言葉に

関連して、物流会社は、社員が考えて働き、受け身な業務から能動的な業務をすることだと仰っていました。明確な答えのない世界だから、理解力と記憶力だけでは生きていけないということも、現場力に繋がるのだと思います。

講義のあった翌週の見学では、会社自体の雄大さを実感できました。大型船を受け入れることのできる長い棧橋や、小麦を吸い上げる機械、さらに小麦を保管する多数のサイロなど実物は、映像で見ていたよりもはるかに大規模で、その迫力に圧倒されました。

また、サイロの周辺には大手の製粉会社や食品会社が隣接しており、原料である小麦を輸入し保管する千葉共同サイロは、重要な仕事を担っていると改めて認識しました。見学中の説明のなかで、機械を止めないように日々点検し、音と臭いで不備を判断するという具体的な現場力の例を伺いました。現場力とは、理論的なことではなく、その場で働く人しか分からない、現場で身につけるしかない能力なのだと思います。

見学後に、会社の役員の方からお話がありましたが、仕事をするに関してのお言葉に感銘を受けました。1つ目は、「どんな仕事でも工夫すれば楽しくなる」です。仕事は楽しいことばかりではなく、楽しくするために自分で動かなければ状況は変わらないことだと思いました。これは、私もアルバイト中に実践するようにしています。「楽しくない」と思いながら仕事をするより、「楽しくするためにはどうしようか」と考えたほうが



内藤 常男 社長

自分も楽し、仕事内容も充実してくると思います。将来働くようになった時には、これを忘れないようにしたいです。

2つ目は、「仕事の報酬はおカネだけでなく、仕事にも返ってくる」です。目に見えるものとしてはおカネで現われますが、それだけではないのだと思いました。確かに仕事をした分だけ給料は頂きますが、その給料の基となる仕事がなくではなりません。アルバイトはおカネのためだけであっても、社会人はそれに加えて、さらなる仕事のために働くものだと思います。自分の仕事に誇りをもてるような職業に就きたいと思えます。少なくとも見学でお世話になった方々は、自分の仕事に自信をもって仕事をしているように感じました。

今回の講義と見学を通じて、千葉共同サイロという会社を知ることができただけでなく、仕事をする事の大切さと、それに向き合う事の重要性を学ぶことができました。就職活動を始めるこの時期に、大変貴重な体験ができたことを感謝します。

### 第3回目 [12月7日(水)]

講師：都一(株) 柴内 博之 取締役

#### 「都一について」

国際学科3年生 田村 政樹

都一は社員25名程度という小さな規模の製麺メーカーですが、製品の70%を海外に輸出しているという最初の説明に軽いショックを受けました。

なぜ海外でそれほど売れるのかという理由のひとつは、日本では食品を買ったら数日のうちに食べるのが主流ですが、海外では賞味期限の長いものが消費者に好まれるということでした。そこで、都一では油で麺を揚げずに常温でも賞味期限を長くするような商品開発を行ない、海外向けに販売し

ました。その際、日本国内で製造された食品の信頼性が高いという特性を生かすため、海外向けでも日本語表示のまま販売しています。海外に住む日本人にと



柴内 博之 取締役

っては国内と同じ感覚で安心して買えるし、外国人にとっても日本製ということが分かりやすく、安全だと信じて買ってもらえるという利点があるようです。

もうひとつの理由は、味をそれぞれの国の人たちの好みに任せるため、「無味の」うどん麺を商品としていることです。この場合、日本の味覚を強制せずに、現地の人の好きなように味付けを行ない、食べることができます。もちろん、パック詰めのつゆを使えば日本風のうどんも食べられますが。このようにして、香港やタイなどのアジアだけでなく、アメリカやヨーロッパにまで輸出されているのは驚きです。

都一はこの先、日本食が多く輸入されていないインドにも、彼らの好みであるカレーの味付けをしてもらおうよう麺を販売したいと検討しており、東南アジアにも現在は富裕層しか売れる可能性はないが、もし、TPPが成立すれば高い関税がなくなり輸出しやすくなると期待しています。私も、日本国内では人口が減少しているのに、海外にマーケットを求めるほうが可能性は大きいと思いました。

都一の柴内先生から、日本と世界の壁がどんどんなくなっている時代には、海外は身近にあるという意識を持つことが良い、次にコミニケーション能力を養うこと、というアドバイスをいただきました。

私は、この大学に通ったことで、今までの日常では係りを持つ機会がなかった留学生に囲まれて視野が広がり、今はグローバルな世界なのだという意識が芽生え実感しています。せっかく芽生えた意識なので、もっと日本のことをよく知り、言葉はしゃべれなくても気持ちで引かないような意識を、これから社会に出てからも保ち続けたいと思っています。

#### 第4回目 [1月11日(水)]

講師：住商グローバル・ロジスティクス(株)  
渡辺 賢一 社長

#### 「住商グローバル・ロジスティクスの 講義を聴いて」

国際学科3年生 鈴木 美保

講義内容は、前半が物流の基礎について、後半が具体的な千葉県物流についてでした。

前半の講義で印象に残ったことは、物流ではカネ・モノ・情報が流れているとの説明で、特に情報が動いていると知らされた点が新鮮に感じました。

また、物流の機能が発展段階ごとにレベルがあり、「物流」という時にはレベル2(文末「注」を参照)の状況を指すことを初めて知りました。さらに、住商グローバル・ロジスティクスの担う物流の業務内容は、レベル3のロジスティクス・サプライチェーン・マネジメントであることも教えていただきました。初めに会社の名前を聞いた時は、意味の不明なカタカナが多いため業務内容が見えてきませんでした。この話を聞いてビジョンが見えてきました。

次に話していただいた「ロジスティクス」の意味に、そうなのかと納得させられました。それは、ロジスティクスは元々戦争用語で兵站<sup>へいたん</sup>を意味し、部隊の移動と支援の計

画・実施のことだと初めて知ったからです。さらに、アメリカの行なった2つの戦争(湾岸戦争とイラク戦争)を例にして、「どれくらいの戦力で、どれくらいの期間」戦えるのかを説明していただいたので、良く理解できました。この2つの戦争の間で、情報の処理能力が飛躍的に進歩し、軍需物資の輸送能力にも明確な違いがあった点で分かりやすいと思いました。

後半の講義では、千葉港と東京港での輸出入商品にはっきりした違いのあることに驚きました。日本の貿易港は多数ありますが、港によって取り扱う商品が違っている点を改めて認識させられました。

前半の講義との関係では、コンテナ輸送が戦争とともに発達したことは、戦争による効果なのかとも感じました。また、コンテナ船の受け入れの多い港が東京港で、逆に少ないのが千葉港であるということも理解できました。

他方で、航空による物流についての説明も印象的です。それは、航空輸送の貨物にもコンテナが使われていて、旅客機の下半分が貨物用だという点です。コンテナも航空機用に改良されていることも興味深く聴きました。

また、サプライチェーン・マネジメントについての説明は、「たまごっち」を例にお話していただいたので、分かりやすく面白く聞くことができました。多数の一方通行的な情報伝達は無駄を生みやすくなるという問題を、「たまごっち」のブーム時に発生した生産過剰の原因の説明で納得させられました。子供



渡辺 賢一 社長

の頃におもちゃ屋さんで「たまごっち」を  
買いに並んだ経験があったからかも知れま  
せん。

サプライチェーン・マネジメントは、こ  
のような在庫過剰による特別損失を発生さ  
せないように、関係各社が協力して効率的  
に物流するシステムであることが分かりま  
した。そして、より効率化するために情報  
システムとロジスティクスの整備が必要で  
あることも理解しました。

(注) 物流の機能

レベル1：単なる輸送や保管

レベル2：輸送数量・輸送日に合わせて最適トラ  
ックを手配し、運行管理する最適な場所に倉庫  
を手配し、貨物の入出庫、保管数量を管理する

レベル3：必要な時に、必要な物、量を届けられ  
るよう設計し、在庫量を管理しつつ受発注と輸  
送・保管を行なう





## フード&アグリ研修報告

---

- A フード&アグリビジネスの試み
- B 味噌旅行を終えて
- C アメリカ海外スクーリング：サンフランシスコ7日記
- D アメリカ海外スクーリングを終えて

# フード&アグリビジネスの試み

## 国内研修・海外研修の記録

国際学部国際学科教授 村川 庸子

敬愛大学国際学部国際学科では2011年からカリキュラムに「フード&アグリ」ビジネスを採り入れています。農業県である千葉を意識し、「世界の食と農」「生物と環境」「環境と農業」など広い視野に立って「食と農」をみることができると、「経営学」「国際経営」「マーケティング」「マーケティングリサーチ」「国際貿易論」など、実践的な科目を用意しています。「千葉の経済構造」や「千葉の経済特殊」などでは地元の農家さんや企業の方にご講演をお願いしたり、見学にうかがったり、現場を知る機会を作ることを目的としています。

さらに学生たちが主体的に関われるようにしたいということで、準備段階の2010年度からさまざまな試みを行ってきました。その中心になるのがこれからご紹介する長野・山梨への味噌文 探訪の旅（2010・2011年度実施）とアメリカへのスクーリング（2011年度実施）です。

味噌文 探訪の旅は、いずれも初日は、宮坂醸造さんのお世話で、2010年度は長野県諏訪市の丸高蔵さんで、2011年度は山梨県韮崎市穴山町で味噌作りを、2日目は2年とも山梨県北杜市の「おいしい学校」でほうとう作りを行ないました。

長野・山梨はグリーンツーリズムが盛んな場所で、行政も「食&アグリ&旅行」に熱心に取り組んでいるように思われます。味噌作り、ほうとう作りを学びながら、地元の人々と触れ合い、千葉とは一味違う伝統文 や社会を学んで欲しいと思っているのです。

アメリカのスクーリングを引率するのは実に11年ぶりのことでした。サンフランシスコといえば観光の街、都会的なイメージをもたれるかも知れませんが、今回はあえてテーマを「フード&アグリ」におきました。アメリカは農業大国でもあります。大都市はいずれも周辺を広大な農地で囲まれている

◆ 表1 フード&アグリ関連科目 ◆

1年次	「千葉学Ⅰ」「世界の食と農」「生物と環境」「経営学入門」
2年次	「千葉学Ⅱ」「千葉の経済構造」「環境と農業」 「アグリ・フードサイエンス」「マーケティング」 「マーケティングリサーチ」（社会調査のためのデータ解析）「経営学」
3年次	「千葉学Ⅲ」「千葉の経済特殊」「アグリ・フードビジネス」 「中小ベンチャー企業論」「国際貿易論」「国際経営」 「マーケティングリサーチⅡ」（経済・経営のためのデータ解析） 「フィールド調査」

て、都市近郊型農業が盛んに行なわれています。

2日目はサンフランシスコを南下し、スタインベックの生地として有名なサリナスに向かいました。バスで通り過ぎるだけなら「広いねえ」で終わってしまうところですが、今回は体験農場へ行き、取り立てのセロリを口に運んでもらいました。日本のスーパーで買って食べるのとは一味も二味も違う

はずです。有機栽培のイチゴも歓声があきます。「おいしい！」畑でキャベツの栽培にいそしむメキシコ人労働者の姿もみました。かつてはこの町で多くの日本人移民が働いていたのです。

詳しい話は学生さんの報告に譲ります。国際学科では今後も「フード&アグリ」に取り組んでいます。またご報告したいと思います。



宮坂醸造さんがおにぎりと具沢山のお味噌汁を用意してくださいました



ツインピークスよりサンフランシスコ市街を臨む



## 味噌旅行を終えて

国際学部国際学科3年 杉浦 脩吾

大学の学外研修の一環で、長野県に味噌作り体験に行きました。交通手段として、学校のバスで行きました。紅葉の頃であったためか、片道4時間という長旅でした。

初めに到着した味噌工場で、おにぎりとう味噌汁を出してもらいました。ただのおにぎりとう味噌汁でしたが、長旅の疲れを忘れさせてくれるくらいのおいしさでした。この時に食べた味噌を私たちが作ることになっていました。

ここで、長野の味噌について説明したいと思います。長野の味噌は、甘さがなく、濃 な味であり、大豆の香りが強いので、ごはんと一緒に食べると合うように作られているそうです。そのため、「味噌をおかずにする」という考え方が強いのです。

さて、食事を終え、私たちが味噌を作る時間になりました。味噌作りを教えてくれたのは、3年連続で味噌の大会で金賞を取った名人でした。その方は、味噌作りにおいて一番大切なことは、真心を込めて一生懸命味噌をこねることと、できた味噌を適した温度で大切に保管することで、これによって味噌の味が決まるということを強調して話していました。私は味噌作りを体験したことがなかったので、名人が言っていることが、まったくわかりませんでした。煮大豆や麴、塩を渡され、袋に詰めて味噌をこねる作業を行なって10分した時に、やっと名人が言っていたことが理解できまし

た。正直味噌をつぶすのは簡単だと思っていましたが、なかなか大豆が細かく崩れなくて、すごく難しかったです。それでも20分同じ作業を行なっていたら、上手に作る事ができ、すごく感動しました。

こうして、私たちが作った味噌は、味噌専用の入れ物に入れて手渡されました。私はすぐ食べられると考えていましたが、指導してくれた人に最低でも6ヵ月たないと食べられないから、しっかり涼しい所で保管してください、と言われました。こうして、味噌体験が終了しました。

味噌作りが終了した後で、味噌工場関係者は、私たちにこんな話をしてくれました。世間一般の人たちは、味噌という商品が完成した形で全国のスーパーに並んでいるものという考え方があります。でも元々、味噌というのはそれぞれの家で手作りしていたものでした。自分たちは、長野県の人たちが味噌作りの体験できるよう活動を行なっているのだから、千葉に帰ったら、味噌の作り方を地域の子供たちに教えてほしいと言われました。私はこの言葉を聞いて、味噌作りは楽しいものであるということ、家族の人や留学生や千葉の子供たちにも教えたいと思いました。こうして1日目は終了しました。

2日目は、山梨県でほうとう作り体験を行ないました。まず、このほうとうを教えている場所に驚きました。そこは、廃校にな

った小学校をそのまま県が買いとって、近隣に住んでいる市民団体の集まる場所として提供したもので、ほうとうを作る時は、ほうとうの授業を受けているような感じでした。

ほうとうは、味噌の時と違ってすごく難しかったです。なぜなら、粉から生地を作り、何回もこねて、うどんを作る時と同じように、こねる時にすごく力を入れないと上手に生地がまとまらないのです。これだけではなく、その生地を均等に切ることができず大きさがバラバラになってしまい、本当に難しかったです。

ほうとうを実際に食べた時に、一生懸命自分で作り、作った苦労を思い出しながら食べたら、涙が出るくらいおいしかったです。こうして、ほうとう体験も終了しました。

最後に、味噌旅行を終えての感想を述べたいと思います。

私は幼い頃、北海道に住んでいて、そこで初めて味噌というものに出会いました。

北海道で食べた味噌は、大豆の香りが強く、濃に作ってあり、少し甘目で、体を温めるための食べ物だとずっと思っていました。長野県の味噌を食べた今回は、北海道の味噌とは違い、味噌をおかずという考え方で食べたこともあり、地域によって、製造過程や味が違ってくる味噌という食べ物は、すごく面白い食材であり、私たち日本人にとって欠かせないものであるということを実感しました。

また、味噌体験を地域で活性化させるために、地域の中学校や児童館などで味噌作りを体験できるようにしたらどうでしょう。親子で楽しめて、実際の体験を通じて味噌を理解できるので、実現できるよう私たちも頑張りたいと思っています。

この間、自分で作った味噌を食べたら、さっぱりしておいしかったです。やっぱり一から作ったものは、スーパーで買うより3倍おいしい。こういう思いをたくさんの人にしてほしいと思います。

# アメリカ海外スクーリング

## サンフランシスコ7日記

国際学部国際学科3年 目良 真樹

### 1日目

#### ●Twin Peaks

初日、最初に向かったTwin Peaks (ツインピークス) とは、「2つの頂」という意味である。双子のように山の頂が並んでおり、標高が高いため多くのテレビ塔などが建っている。頂上まではバスで行くことができ、上からはサンフランシスコの街が一望できる有名観光スポットのひとつ。この日も展望エリアは多くの観光客、地元の人々で溢れていた。

この日はとてもいい天気です。ツインピークスから街の向こう側に、はっきりとゴールデンゲートブリッジを眺めることができました!!

#### ●Golden Gate Bridge

サンフランシスコの主要観光地のひとつ。最も高い塔は227m、建設に携わった主要人物はJoseph Strauss (ジョセフ・シュトラウス) であり、橋の展望スポットには彼の説明が書かれた碑がおかれている。

この近くにあるお土産屋さんで友人が初の買い物。5ドル札をくずしたためおつりをもらったが、計算が違うのでは? と2人で困惑……。しかし、セントコインの額を見間違えていただけだった。ガイドさんから説明を受けて納得した。



写真でよく見る光景です! 想像以上に主塔が高く、赤い色が青空によく映えています。海側を見渡すとアルカトラズ島が見えます!!

#### ●Union Square (バスの中から)

サンフランシスコの都市部。多くのケーブルカーや路線バスの通過点で、有名ブランド店やショッピングモールがみっしりと建ち並ぶ。その他にも豪華な市役所、オペラハウスなど日本で言う東京のようなセレブや若者が好む施設・店がある場所だ。ただ、ガイドさんの話によると、一見華やかな場所だが一本路地に入ると治安が悪い部分もまだまだあるようだ。実際にバスのなかからも怪しいお店や怖そうな人を見たため、街を歩く際の注意は厳重にしようと思った。

#### ●Fisherman's Wharf (farmer's market)

海を見渡せる歩道からファーマーズマーケットは広がっている。農家の人々がそれぞれ生産したものを売っている。かぼちゃ

◆ アメリカ海外スクリーニング ◆

日次	月 日	地名	主なスケジュール
1	10/13(木)		成田空港発(UA838便)
		サンフランシスコ	サンフランシスコ着 【サンフランシスコ市内観光】 ●Twin Peaks ○Golden Gate Park ●Golden Gate Bridge ○Civic Center ○Union Square ●Fisherman's Wharf (Farmer's Market) ●PIER 39
2	10/14(金)	サリナス	【農場体験】 ●The Farm 【国立スタインベックセンター】 ○スタインベックの家 【University of California Santa Cruz訪問】 【UCSCの学生と交流】 ●Watsonville Budonist Temple
3	10/15(土)	サンノゼ	【Yosemite National Park 1日観光】
4	10/16(日)	ヨセミテ	【Japan Town散策】 ●Japanese American Museum of San Jose 【UCSC学生のお話】
5	10/17(月)	サンフランシスコ	【サンフランシスコ市内散策】 ●Chinatown Gate (Union Square) ●Judah & 9th Ave. ●Union Square ●GLBT History museum
6	10/18(火)		サンフランシスコ発 (UA853便)
7	10/19(水)		17:30 成田空港着→解散

やトマト、イチゴなどの野菜と果物の他にもジャム(5ドル)やシャーベット(3ドル)など加工品も数多く揃っている。また焼き立てのパンやチキン、ラーメンの売り場では長い行列ができていた。売り手の人たちは品物が売り切れたら帰るとのこと。売り手と買い手の距離が近く、野菜について聞くお客さんがいたり、店頭でジャムを見ているとその説明をしてくれたり、ここで初めてサンフランシスコの人と交流でき



フィッシャーメンズワーフ

た！

### ●PIER 39

PIER 39はPIER群のなかでも大きく、飲食店やお土産屋が並ぶアミューズメントパークのような場所である。海岸部にはたくさんのアザラシとカモメが生息しているのが特徴。ここからもゴールデンゲートブリッジやアルカトラズ島、サンフランシスコの街を一望することができる！アルカトラズ島とは元々監獄（刑務所）であり、脱獄成功者がいるとかいないとか……。見た感じの空気も独特。

### ●Lombard Street

サンフランシスコの街には坂道がとても多い。沿岸部からバスで移動し、徒歩で長い坂道を上っていくとそこにあるのがロンバート・ストリートである。きれいな紫陽花に囲まれた曲線道を数台の車がゆっくりと下りてきている。長い坂道を上ってきたかいてあって、ロンバート・ストリートのある位置からは建物の隙間から、海まで続く街並みの景色を眺めることができる。

1日目のサンフランシスコ市内観光はここまで。

ユニオンスクエアに戻り、夕食を買いにスーパーへ行くことに。その途中、バスのなかからチャイナタウンを発見！スーパーに寄り、夕食を買ってホテルへ。売っているお肉や飲み物の大きさに驚きつつ、レジの通り方も覚えた！

## 2日目

花の金曜日！TGIF!! (Thanks God its Friday!)

2日目は早朝からホテルを出発し、高速にのって農場体験を行なうファームへ向かっ

た。

### ★アメリカの高速道路

ダイヤモンドレーンは、高速道路の4レーン中の一番左側のレーンのこと。マイクロバスなど2人以上が乗っている車のみ走れる優先道路のことで、アメリカでは1人乗りが一般的なため渋滞緩和やガス排出減少のために設けられている。

日本でもお馴染みの会社（アメリカ本社含む）、TOYOTA、Yahoo!、Google、Facebook、Intel、apple、Microsoftなどがある地域を通り抜けた。

### ●The Farm（農場体験）

訪ねた農場ではオーガニック農業を行ない、化学肥料を使わない自然のままの野菜を育てている。日本の農場とは比べられないほど広大な土地で非常に多くの労働者がそれぞれの仕事を行なっている。

オーガニック農業は近年研究が進み注目されているが、問題点も多く、化学肥料を使う派と使わない派それぞれでお互いの意見を尊重しつつも話し合いが行なわれているようだ。オーガニックの利点は人間や動物の体に安全であるということ、欠点はリスクの高さにある（例えば①ナメクジなどに葉茎を食べられ半分は収穫できない②オーガニックファームの土壌を作ることが難しいなど）。

農場で働いている人々は約5万人で、主にメキシコからこの季節のみ働きにきた人々である。植え付けや水やり、収穫など重労働で地元アメリカの人々はやりたくないそうだ。レタスの栽培場所ひとつでも非常に広く、いくつかあるため季節ごとに使用する土壌をローテーションする。

主な栽培野菜は、レタス（アイスバーグレタス）、ブロッコリー、セロリ、カリフラワー、ストロベリー。アメリカ全土、カナダ

など多くの地に運ばれており、日本、香港、韓国、シンガポールにも輸出されている。

アメリカの農場は広大な分その土地を維持することが非常に難しい。また労働者不足やオーガニックによる困難な栽培など多くの問題を抱えている。そんななか、農家の人々は安全な食物を作るという強い思いをもち、便利な化学肥料を使わずにより良い農業を進めようとしている。オーガニック農業は広く推奨されているようで、1日目のFarmer's marketでもオーガニックを推して野菜を販売している農家が多くあった。

### ●National Steinbeck Center

ノーベル文学賞受賞者スタインベックの記念館。なかには写真やモデルを使って彼の生涯や作品一つ一つの紹介がなされている。カリフォルニアの風景や当時の時代背景がどう作品と重なり合っているかという解説があり、今まで見てきた草原や山々の景色が『怒りの葡萄』『二十日鼠と人間』とつながっていることを確認することができた。大学で勉強した『二十日鼠と人間』の特集スペースがとても広く、嬉しかった。

### ●University of California Santa Cruz

スクールイメージはBanana Slag (黄色いナメクジ)。

一つの町のように広い敷地をもち、教室



ナショナル・スタインベック・センター

ごとの移動をバスで行なうため、いたる所にバス停がある。人文科学、海洋、天文など多くの学科とそれぞれの校舎、寮、談話室、図書館を外観から見学した。周りは森林に囲まれ、自由でのびのびした雰囲気を感じた。

その後ワッソンビルの仏教会に移動し、サラダやサンドイッチを食べながら、いろいろなことを話した。じっくり1対1で英語を使う場面はここが初めてであったため、とても緊張したが、U. C. Santa Cruzの学生さんが「大学はどうでしたか？」や「ヨセミテは行ったことありますか？」など気さくに話しかけてくれたので私も少しずつ英語の会話に馴染んでいくことができた。

また仏教会の方からお話を聞き、日系人が受けてきた差別や御苦労について直に聞くことができた。「Border was made by people」「人間はもともと一つであって、住む場所や食べるものによって黒人・白人・アジア人と分かれてきただけ。差別すること自体がおかしい」という言葉がとても印象に残っている。差別は日本人のなかでも存在する。しかし人間がもともと一つであり、みんな同じ人間なのだという見方をすれば、世界中の差別意識がなくなると思う。今回の交流はそれを考えるきっかけとなった。

最後に仏教会のお祈りをする場を見せていただいたが、ここもまた驚きの場であった。なぜなら一般的な教会のように祈りに訪れた者が座る椅子が十列以上並んでいるのだが、目の前には仏様が置かれ仏教の装飾がなされていたからである。アメリカと日本などアジアが混ざったような光景で、まさに2つの国を尊重している日系アメリカ人の方々の憩いの場のような気がした。



仏教会

### 3日目

早朝から出発！

ヨセミテの敷地内にはダムがあり、サンフランシスコの主要貯水池となっている。

#### ★カリフォルニアの水問題

ヘッチヘッチダム（ヨセミテ）

……North Californiaなどへ供給

フーバーダム（ネバダ州）

……South California、ラスベガスなどへ供給

貯水量が足りないため、地域では農場の水まきの時間を決めたり個人宅での洗車を禁止するといった対策をとっている。

#### ●Yosemite National Park

##### ・ヨセミテ国立公園

1984年世界自然遺産に登録された。最高標高3,500m、敷地面積3,045km<sup>2</sup>（東京都の1.5倍）。哺乳類93種、鳥類240種、昆虫48種、両生類15種、植物148種、魚類12種が生息しているという。なかでも樹齢2700年のジャイアントセコイアが有名！ 公園内の動植物は「生きるために自然に同化」している。

約束…動植物の持ち出し禁止

動物にエサをあげない

クマは50フィート以上離れて見る

Black bear（草食）が有名。グリズリー

ベアは人が近づきすぎたことが原因で事故が多発し、殺され絶滅してしまった。

##### ・ハーフドーム

トンネル・ビューから見えるハーフドームはきれいに割れた断面をもつ大きなドーム型の岩。過去、岩がまだ海中にあったころ、氷河で8分の1が削られ今の形になり、長い年月をかけて地上に現われ、今に至る。

##### ・ブライダル・ベール

トンネル・ビューからハーフドームとともに見ることができる。高さ189mのU字型の崖から流れ落ちる。花嫁のベールの形に似ていることからこの名前がついた。

##### ・エル・キャピタン

エル・キャピタンとは「インディアンの総長」という意味で、1,089mの一枚岩。近くにはスリーブラザーズという総長の息子を表わした岩もある。ロッククライミングの名所であり、多くの人々が集まり2、3日かけて頂上を目指す。速い人は数時間で上る。

##### ・ヨセミテ

739mの落差は世界No.5である。滝は3つの大きな段差があり、一番下の落水地点には岩場が広がり滝を目と鼻の先に感じることができる。

### 4日目

#### ●Japan town (San Jose)

ヨセミテを出発し、サンノゼのジャパントウンへ向かった。ジャパントウンには日本人が多く生活している。昼食を買ったスーパーでは日系人とアメリカ人が働いていた。その他にもお寿司屋やそば屋など日本食の飲食店が点在し、都市部と比べると、とてもどこかで日本人の好みそうな雰囲気をもっていると思った。

## ●Japanese American Museum of San Jose

日系人のマイケルさんに案内していただいた。博物館内では日系人の歴史や日米戦争中の強制収容所の建物を紹介している。

アメリカで生活し始め1800年代にはまだ差別があり苦しい生活をしていた。そして日系人の法律ができ徐々に生活が確立されてきた経緯、アメリカでの日系人の活躍などを、写真や年表でわかりやすく説明している。



### 5日目

観光のできる最後の日。ユニオンスクエアを一通り見たあと、路線バスmunilに乗り遠出した！

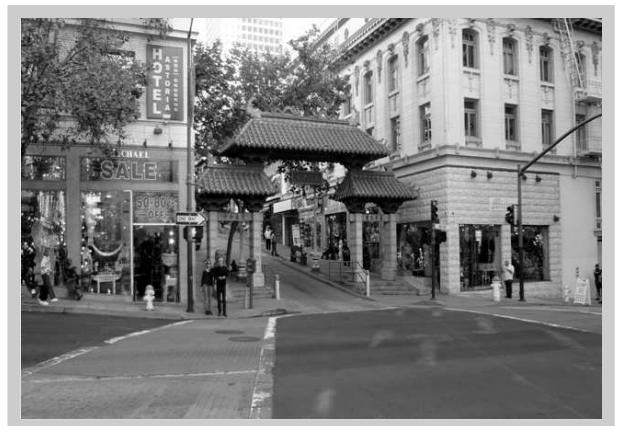


Japanese American Museum of San Jose

## ●Chinatown Gate (Union Square)

ユニオンスクエアの北部にあるチャイナタウン。華やかなお店が連なる一角に中国風の大きな門があり、その場だけ中国の雰囲気漂わせる落ち着いた通りになっている。通り沿いにある標識は英語と中国語両方で書かれている。

その後、Powell駅からmunilに乗りJudah & 9th Ave.駅へ。



## ●Asian Town (Judah & 9th Ave.)

昨日はサンノゼのジャパントウンだったが、今日はサンフランシスコ市内のアジアタウン！ のどかな雰囲気は変わらず。

アジアタウンには日本食、タイ料理、中国料理など、一つの通りにさまざまな国の飲食店が点在している。お昼は皆でタイ料理のお店に入る。



中華街（上）とアジアタウン（下）

## ●Union Square

中心都市でショッピング。NIKEやGAPな



ど有名店の本店がある。有名ブランドのほとんども建ち並んでいる。しかし路地裏は治安が良いとは言えず、豪華な街並みの表と裏が顕在している。

ショッピング後、みんなと合流しmuniに乗って移動。Castroへ。

### ●GLBT History museum

この地域は駅を出たところから独特の空気がある。博物館に行く通りには何人かのゲイの人たちがおり、男性用の下着売り場などがたくさん並んでいた。

博物館のなかにはゲイの人が実際に着用した服、レズビアンの人の写真など生々しいものが多く展示されている。同性愛は今では広く認知されているが、少し前までは肩身の狭い思いをしていた。同性愛だからと殺された人もおり、彼らの立場を確立させるために活動を起こした人物の紹介もされている。アメリカに渡った日本人でゲイであると公表した人物もいたようだ。

性別とは考えていたほど確固としたものではなく、実は奥深い。GLBTであるという理由で周囲から差別されていたという過去の事実を忘れず、個人として尊重していく気持ちが大切であると思った。

博物館をあとにし、ホテルへ……。

## 6日目

朝食後、ホテルからシャトルバスに乗り空港へ出発。最後のサンフランシスコ！

### ●San Francisco International Airport

チェックインを済ませ、空港内のお店や免税店でショッピングをし、お昼も食べた。

飛行機に搭乗し14:30頃サンフランシスコを出発。本当にサヨナラだ！

飛行機内では機内食を2回食べ、あとは熟

睡。気がつけば成田上空で予定より約1時間遅れて帰ってきた。

### ●最後に

今回のスクーリングを通して、日本にいた時には想像できなかったアメリカの規模の違いを感じることができた。

ヨセミテ国立公園では太古からの大自然に触れ、何ヵ月かけても周りきれないのではないかと思う程の広大さと、首が痛くなるほど見上げても頂上が見えない木々や岩などで、サンフランシスコの都市部とは別世界に思えた。アメリカの広大な土地から、サンフランシスコのように華やかな都市部と昔のままの大自然のある土地など、まったく異なる光景をもった場所が多く生まれてきたのだと思った。

またアメリカは「自由の国」、サンフランシスコは「移民の町」というように非常に多くの国からやってきた人々がいる。アメリカは多くの移民を受け入れているという簡単な知識はあったが、そこには差別問題や移民とアメリカ人との間の確執があり、特に日系人はどうやって立場を確立させてきたのかが分かった。しかし日本人がアメリカの土地で一生懸命働いても、アメリカ人にとっては良く思われないこともあり、外国で生活していくことには言葉や文化の違い以外にも難しさがあるようだ。

そして今現在でさえ、移民についての研究や活動がなされていると聞き、世代を超えてこれからの生活や新しく移民してくる人々について考えていく必要があると感じた。サンフランシスコのジャパントウンやチャイナタウンなど、一つの都市にいくつもの顔があることから、それぞれのタウンを造った人々は、同じ国の者同士で協力して生きていこうとしたのではないかと思った。

また、GLBT History museumに象徴さ

れるように、アメリカは人権に対する意識も規模が違う。日本ではGLBTの人に対する認識が非常に少ないと思うが、アメリカのいくつかの州では、同性愛者同士の結婚を認めるなど、さまざまな人が存在することを踏まえて彼らの人権を尊重している。その意識の根本になっているのは、広い土地と多くの人、そして自分たちの国以外の人々を多く知っていることであり、そこから幅広い視野に立った考え方ができているのだと思う。また差別や迫害の歴史を博物館として公開していることも素晴らしいと思った。私自身、知識があまりなかったので怖く感じた瞬間もあったが、日本でもありうることだし、今までの型にはまった物の見方ではいけないと感じた。

サンフランシスコは本当にさまざまな面を備えた町だった。日本からは観光地のように華やかな一面しか見ることができなかったが、今回実際に町を巡ることによって、治安の悪い一面や、郊外ののどかな土地、農業の重要生産地であると同時に問題点を抱えているファームなど知り、今回の凝縮された5日間で認識を改めた。

そして初めて英語圏で英語を使うことができ、言語面でもよい勉強になった。買い物やホテルで英語でコミュニケーションできたことは、大きな達成感につながった。まだまだ理解できない言葉や積極的になれない部分があったので、これからの課題となった。



サリナスの体験農場

# アメリカ海外スクーリングを終えて

国際学部国際学科3年 齊藤 友弥

はじめに

私たちは、10月13日～19日までのスクーリングで、サンフランシスコを中心にさまざまな場所を訪れた。このレポートでは、1日目から順を追って、旅の記録やそのなかで私が感じたことについて書いていきたいと思う。

10月13日（スクーリング初日）

成田空港からおよそ8時間のフライトでサンフランシスコに到着。この日は1日バスによる市内観光ということだった。

空港を出てすぐ目についたのは、いくつもの家が建ち並ぶ住宅街だった。日本と特に異なる点として、個人の住宅やアパートなどの集合住宅が1枚の板などで仕切られていて、さながらひとつの大きな長屋を形成しているような光景が大変新鮮に感じられた。

住宅街を抜けて最初に訪れたのは、「ツインピークス」と呼ばれるまるで双子のような山だった。ネイティブアメリカンの伝説によると、この山は元々1つの大きな山だったのだが、ある日そこに住んでいた夫婦が神の怒りに触れてしまい、山を2つに分けられてしまったのだそうだ。ここから見る景色は実に雄大で、サンフランシスコ市内が一望することができた。

次に私たちは、ゴールデンゲートパークに立ち寄った。120万坪という広大な敷地

には子どもの遊び場から日本庭園まで、多種多様な施設があり、公園というよりは一大観光施設という趣だった。

その後、ゴールデンゲートブリッジやアルカトラ 島などを見て回り、ファーマーマーケットで各自昼食をとった。私が食べたのは「PIZZA POLITANA」という屋台のマルゲリータピザ（8ドル）だったが、日本のピザよりチーズが濃厚で、美味しく感じた。昼食後はディ ニーランドに次ぐカリフォルニア第二の観光スポット「フィッシャーマン ・ワーフ」を訪れ、散策や写真撮影、お土産購入などをそれぞれ楽しんだ。その後は大型スーパー「セーフウェイ」で夕食の買い物をすませ、バスから中華街やイタリア人街を見て空港近くのホテル「サウス・トラベロッジ」に到着。

10月14日（スクーリング2日目）

サリナスに移動し、農場体験を行なった。カリフォルニア州モントレイ郡にあるサリナスは、農業と観光を主要産業とする街で、特に農業に関しては、イチゴ・セロリ・レタス・ブロッコリーなどを中心に何種類もの作物を育てており、地元やアメリカ国内への供給のみならず日本・韓国・シンガポールなど国外への輸出も盛んに行なわれている。人口は1万5,000人ほど。その大半が農業ないしは農業関連の仕事に従事しており、この他にも主にメキシコから5万人ほ

どの農業従事者が来ている。サリナスはどのように農業が盛んに行なわれていることから、俗に「アメリカのサラダボール」と呼ばれている。

このサリナスにある農場「ザ・ファーム」で農業を営んでいたデイヴィッドさんの案内でファームのなかを見て回り、農場で育った無農薬の新鮮なイチゴを食べさせてもらいつつ、オーガニック農法と従来の農法の違いや、時期によって育てる作物を変えて土壌を健康に保つ「ローテーション」など、農業について一歩踏み込んだお話を聞いた。この日の昼食はザ・ファームにてサンドイッチや新鮮な野菜、果物をいただいた。私はハムサンドを食べたのだが、日本のものとは違いハムがぎっしりと何枚も挟まっていたのが印象的だった。

その後は、サリナス生まれの作家ジョン・スタインベックの記念館「国立スタインベックセンター」を訪れた。彼は「怒りの葡萄」や「エデンの東」などカリフォルニアを舞台にした著作で知られるノーベル賞作家であると同時に、工場勤務や海洋生物の研究などさまざまな経験を積んでおり、館内の展示は作品に関するものだけでなく、彼が実際に研究した生物の標本が並ぶなど、スタインベックならではのユニークなものだった。

次に私たちは、カリフォルニア大学サンタクルー校（UCSC）を訪問。そこで学校の施設などを見学した。この大学は主に歴史・人文系の学科が中心の大学で、1つの都市のように広大なキャンパスが特徴。

ここにはUCSC独自の試みとして「ナガミネ・プロジェクト」という研究チームがある。戦後にアメリカに移住した新日系1世「ナガミネアキラ」さんの人生を通して、アジアやアメリカの近代史を研究しようというのがその目標である。

この日の夕方、ワトソンヴィルという街にある日本仏教の寺院「ブッディスト・テンプル」を訪れ、アジアの歴史を専攻するUCSCの学生の方々、ナガミネさんご本人や親族の方々と会食。その後、僧正のハナヤマさんからこの寺の成り立ちについてのお話を聞いた。

この寺は、かつて子供を亡くした日本人移民が、アメリカに西本願寺の僧侶を要請したのがその始まりで、「人種はあくまで人間が勝手に定めたものであり、元を辿れば皆同じ人間なのだから分かり合える」というのがその理念である。会食の際、UCSCの学生さんは、日本人である私たちとも積極的に会話をしてくれたのがうれしく思え、人種の垣根を越えるというこの寺の理念にも共感を覚えた。

この日は「ローレル・イン・モーテル」に宿泊。

### 10月15日（スクーリング3日目）

終日、ヨセミテ国立公園を観光ということで、サリナスを出てバスで4時間ほど北東、ヨセミテに向かって進む。

都市部を離れていくにつれてビルなどは姿を消し、山や畑など自然の景色が目に入るようになっていく。「サンルイス・リザーバーステイトレクリエーションエリア」という湖が広がり、葡萄やサトウキビ、アーモンドの畑や木の生えないはげ山が広がっている大きな田舎道をしばらく進むと、ヨセミテ近郊の「マリポサ」という街に着く。ここは、アラスカから渡り蝶がやってくるということで、スペイン語で「蝶」を意味するこの名がついたらしい。

途中、「バーガーキング」という店で本場のハンバーガーを食べた。私が食べたのは「ホッパーJr.」という小さめのハンバーガーだったが、それでもいささか大きく日本で

---

言うMサイ ほどの大きさだった。肉は大変ジューシーで、パンや野菜との相性もよかった。

その後、ヨセミテ国立公園に着いたのだがここでは、まず東京都の面積の1.5倍だというその広さに圧倒されてしまった。「ヨセミテ」という言葉はネイティブアメリカン・アワニ族の言葉で「熊」を意味し、草食の熊などの哺乳類や魚類、鳥類、両生類など野生動物の宝庫といった印象を受けた。その地形は氷河でできたという説が有力。アメリカの国立公園のなかでも歴史は古く、1970年代からあらかじめ区画を決め、人工的に火事を起こして生態系を守るという工夫がされている。公園内は「エル・キャピタン」という巨大な一枚岩や、揺れる花嫁のヴェールのような美しい滝「ブライダルヴェール」、山より大きくドームを削り取った形の岩「ハーフドーム」などさまざまな自然の風景に彩られ、見ていて飽きることがなかった。

公園観光の後は「テント・キャビン」というホテルに宿泊。その名の通りテントのような佇まいでキャンプ気分が楽しめるホテルだった。

#### 10月16日（スクーリング4日目）

ヨセミテを出発後、まずは数時間走ったところにあるフルーツスタンド「フルーツバーン」にて休憩。ここはフルーツやナッツ類を多く取り揃えているほか、3.5ドル払ってコップをもらえば、新鮮なオレンジジュースを飲むことができる。

その後、途中で休憩をはさみつつしばらく走ったバスは、サンノゼにあるジャパントウン（日本人街）に到着。現地にあったスーパーマーケットで買出しをして、日本の物と同じパックのおにぎりやお弁当で久しぶりの和食を食べた後、サンノゼの街にあ

る日系人ミュージアムを訪問。そこで日系2.5世の世良さんやUCSCの学生の方から、アメリカの日系人の歴史について話を聞いた。明治時代のはじめに日本で職を失った人々が、働く機会を求めてロサンゼルス、サンフランシスコ、シアトルなどの農場にやってきた。彼らはアメリカに長く住むため、服装を真似る、ボーイスカウトに入るなどして自らをアメリカ人に近づけようとしていた一方で、餅つきなどの日本文化を家族に伝え残そうとしていた。

こうしてアメリカに渡った日本人たちは家族を作り、やがて日系アメリカ人と呼ばれる人々が登場する。アメリカにはその後、40人ほどの日本人街が作られたが、現在では3つほどしか残っておらず、その内の1つがこのサンノゼなのである。日本人がサンノゼに住み続けたのは、すでに中国人街があり中国人がある程度の勢力をもっており、農場での仕事も豊富にあったのが理由とされている。

ここではかつて自分が大学の講義で学んだ事柄——たとえば「紳士協定」や「写真花嫁」——などを再確認する事ができたが、新しく学べたこともあった。

ミュージアムを出た後はバスに乗り、オラクルやヤフーなど多くのIT企業が拠点を置くシリコンバレーを車窓から眺めつつ、再びサンフランシスコのトラベロッジに宿泊。

#### 10月17日（スクーリング5日目）

この日は、サンフランシスコ市内の観光が中心だった。ユニオンスクウェアから坂の多い市街地を歩き、まずはチャイナタウンを散策。そこから途中で電車での移動もありつつアジア人街に到着。そこには日本や中国やのみならずタイやインドといった東南アジアの店も軒を連ね、一種独特の雰

困気をかもし出していた。そのアジア人街で昼食をとり、1人12ドルほどでタイカレーや生春巻きなど、本格的なタイ料理に舌鼓を打った。

その後、再びサンフランシスコに戻り、しばらく自由行動をした後、カストロ通りにある「GLBTヒストリーミュージアム」に向かった。ゲイであることをカミングアウトして暗殺された政治家ハーヴィー・ミルクやホモセクシャルの日本人移民で戦争による激動の時代を生き抜いた大沼二郎氏など、GLBTの著名人に関するものを含むさまざまな展示やキュレーターの方の説明から、このミュージアムが「性的マイノリティを決して好奇の目で見ることはせず、彼ら彼女らに対する差別や偏見をなくしていきたい」という目的に、真摯に取り組む施設であることが分かった。私自身、GLBTに属する知人がいることもあり、そのような人々に対する接し方など、色々考えさせられるところがあり、そういう意味ではとても貴重な体験だったと言える。

#### 10月18日（スクーリング6日目）

バスで空港に直行。手続きを終え、そのまま飛行機で成田へ。

#### 10月19日（スクーリング最終日）

夕方5時過ぎに成田着。

#### 総括

私が今回のスクーリングに参加してよか

ったと思えたのは、積極的に参加することで通常の観光旅行や座学では得られない、さまざまな「気づき」の機会に恵まれたことだった。たとえばサリナスでの農場体験では、アメリカの農業と日本の農業の違いについて、UCSCやブッディスト・テンプルの方々との交流会では、異文化コミュニケーションの何たるかについて、そしてジャパントウンや日系人博物館では、日系人の過去と現在について、自らの目や耳で感じて気づくことができた。この1週間予定が詰まっていた、どうにも忙しい感は否めなかったが、それでも1日ごとに新しい発見があり、すこぶる充実していた。このスクーリングは、私にとって単なる勉強というよりも、一人の人間として視野を広げるためのいい機会だったとすら思える。また、わずか1週間程度の滞在ではあったが、今回のスクーリング以来、ネイティブの人々との会話に抵抗がなくなりつつあることも、私にとってはうれしい誤算だった。私がかねてより「自分の英語は本当にアメリカで通用するのか」と不安に思っていたが、それでもアメリカに行ってから、通りすがりの人から大学生までさまざまな人に自分から話しかけることができた。無論、通じないことや分からないこともあったが、それでも多くの場面で自分の英語が通じたことが、自分にとってはささやかな自信や学習継続のモチベーションになっている。今回のスクーリングは私にとって大変有意義で実りのあるものだったと、胸を張って言える。

# Chapter 04



## 学内での学生たちの活動

---

- A 2011年ワールド・フェアを通して
- B 語学ラウンジ便り

## 国際学部国際学科4年 クマル・ダルラコティ

2006年以来、今年で5回目となる敬愛ワールド・フェアは、11月13日の敬愛フェスティバルで楽しく開催され、何のトラブルもなく終わりました。

ワールド・フェアは国際学部の20人ぐらいの有志で構成されています。主な行事は、日本人と留学生との異文化交流を、たとえば民族衣装を披露するファッション・ショー、世界の遊びやフリーマーケットなどを行ない、お互いの相互理解や結びつきかけを作ることに心がけているグループです。私は1年生のときから積極的に参加してきました。

今年(2011年)もまたこのイベントを行なうと聞いた時は、とても嬉しかったです。リーダーであるESS部の平野 を中心に、今年はフリーマーケット、民族衣装のファッション・ショーとフリーマーケットなどを、敬愛ワールド・フェアで行ないました。このなかで、私は民族衣装のファッション・ショーとフリーマーケットを担当しました。ファッション・ショーの衣装とフリーマーケットの商品は平野 や他のメンバーの協力を得てすぐに用意できましたが、



ショーのモデルをやってくれる学生がいまませんでした。その理由はやはり恥ずかしい、ということでした。そのため、私は友人や周りの人たちを説得したりして、ようやくショーの開催にこぎつけました。

当日は全体としても準備不足で、作業が終了していないところもありましたが、世界の遊びやフリーマーケットに来てくれたお客様たちを楽しませることができました。そして私が担当したファッション・ショーは、最初から協力してくれたESSメンバーと私の友人だけでなく、開催当日まで恥ずかしくて断っていたメンバーたちも最終的には協力してくれて、見に来てくれたお客様を楽しませることができ、今年の世界フェアも楽しく、成功の裡に終わることができました。

ワールド・フェアを1年生の時から続けて参加してきたことは、ネパールから来日して6年目になる私にとってとても誇らしく思っています。このワールド・フェアを企画してくれたリーダーの平野 をはじめ、協力してくれたESS部メンバーやイケシマ先生、高田先生、そして協力してくれた皆さんにはとても感謝しています。本当にありがとうございます。

私はもうすぐ卒業してしまいましたが、皆さんも興味をもったことはがんばって続けてください。私はこれからも興味をもった、楽しいイベントに積極的に参加していくつもりです。



国際学部専任講師 ジェーン・イケシマ

Would you like to practice your English? Or improve your listening comprehension of English? You can do that in the 5th floor Language Lounge.

From time to time special English events are held in the Language Lounge. In the past years:

Wim Wolbrink, an International storyteller from the Netherlands, gave a presentation in which he entertained students with a long story, and afterward had the students discuss the story and its message.

Michael Edwards of Shukutoku University, gave a presentation using photographs, in which he taught students about the Civil Rights Movement in the U.S.

Rosy Ono, a Mexican resident of Japan, has given presentations about her home country during which she taught students about the food, culture, music, dance, and customs of Mexico.

There are English opportunities every week in the Language Lounge as well. On Tuesday and Thursday from 12:25 to 12:50 Mrs. Ikeshima holds English conversation sessions. Anyone may attend. We talk about easy, everyday topics—for example where we live, how we get to school, foods that we like and don't like. Sometimes we play games. Now and then, we learn a song. It's fun to try to speak English. If you don't know how to say something in English, Mrs. Ikeshima and other students are there to help you.

Keiai University also has an English-speaking club—the English Speaking Society, or ESS. This club also meets in the 5th floor Language Lounge. Their meetings are every Wednesday from 12:20 to 12:55. In past years, the ESS has sponsored puppet shows in the Language Lounge, and also participated in the World's Fair at the annual School Festival in November.

There are often other activities, so keep your eye on the Keiai bulletin boards for information. And please join us sometime!



## 付 録

---

Jump into a New World! 規程

執筆者一覧

---

## 付 録

---

# JUMP INTO A NEW WORLD!

## [規 程]



1. Jump into a New World! は、敬愛大学国際学部の学生たちの活動及び学習の成果の発表を目的として定期的に発行される。
2. 刊行については、本学国際学部教授会の選任した編集委員会がその任にあたる。
3. 執筆者は、原則として本学学生及び教職員とする。
4. 原稿掲載の採否は、編集委員会がこれにあたる。
5. 提出された原稿は、編集委員会の裁量によって原稿の内容の主旨を変えずに大幅に訂正する場合がある。
6. 本誌に掲載の原稿の著作権は国際学会に帰属するものとする。  
原稿のデジタル化（CD-ROM掲載、ホームページ掲載）は、国際学会に一任するものとする。
7. 本規程の改正は、編集委員会の議を経て国際学部教授会の承認を受けたものとする。

### [付則]

本規程は2003年4月1日から施行する。

### 編集後記

昨年度は三重苦(大地震、大津波、原発事故)で、国際学部のjump編集も機能停止。学生たちの活動の記録もあわや消滅か、と気を揉んでいたが、2010年度に行なわれた海外スクーリングの記録は「ロンドン・パリ二都物語」という素敵なタイトルで掲載できた。また東日本大震災に、敬愛大学はこう向き合ったというメッセージを込めて特集を組み、巻頭に掲載できた。さらに「フード&アグリビジネスの試み」はこれまでの授業と異なり、現場主義を中心に実践的な活動から学んだ報告である。いずれの学生も自分が感じたことを素直に記している。このような大学の「宝」である学生たちの生き活きた足跡を大切に記録化し、そこに記された彼らの驚き、期待、悲哀などを在学学生たちの今後の生き方の糧にしてもらえば、編集に携わった者として幸いである。

(山本 健)

### 執筆者一覧〈五十音順〉

学 生	野口 耕平
伊原 采佳	根本 啓太
生山 祐介	椛澤 隆介
大阪 翔太	林 秀雲
小澤 明日美	平野 潤
葛馬 敏道	三宅 茜
クマル・ダルラコティ	三好 暉子
小堀 悟	目良 真樹
斉藤 佳予子	リ・タン チュン
斉藤 友弥	渡辺 澄菜
外 祐一	
杉浦 脩吾	教 職 員
鈴木 彩美	櫛田 久代
鈴木 美保	ジェーン・イケシマ
高橋 一晃	中村 圭三
高橋 知実	水口 章
高橋 優太	村川 庸子
田上 華	八代 潔紀
田村 政樹	山本 陽子
中本 小百合	

### JUMP INTO A NEW WORLD!

学生たちの国際体験記 第10集

2012年4月30日発行(非売品)

編集人——国際学会運営委員会

発行人——中村圭三

発行所——敬愛大学国際学会

〒263-8588 千葉市稲毛区穴川1-5-21

TEL. 043-251-6363(代) FAX. 043-251-6407

印刷所——大日本法令印刷株式会社

編集人の許可なく、本文を無断で転載・複写・複製することを禁じます。

JUMP INTO  
A  
NEW WORLD!  
学生たちの  
国際体験記

第

10

集